

那覇市文化財調査報告書第64集

あ じゃ あがり ばる きた い せき
安謝東原北遺跡
め かる こ ぼ ぐん
銘苧古墓群(V)

—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告XVII—

2004年3月

那覇市教育委員会



巻首図版 1 那覇新都心と遺跡の位置 (2003年2月撮影、1 : 10,000)

〔上が北〕



巻首図版2 那覇新都心と遺跡の位置 (1993年撮影、1 : 10,000)

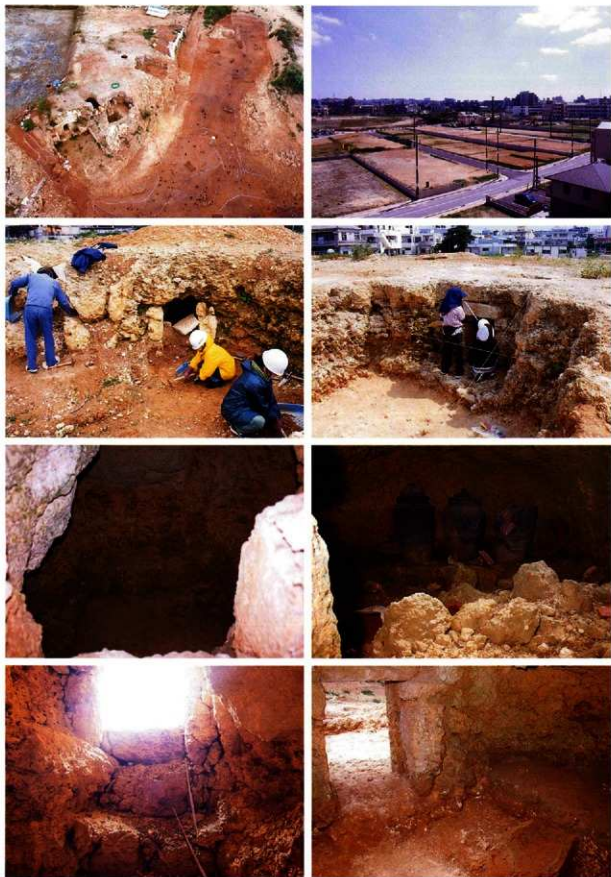
[右が北]



巻首図版 3 安謝東原北遺跡

- 1 段目左：遺跡の完掘状況
- 2 段目左：Ⅲ層上面で検出された遺構
- 3 段目左：出土遺物
- 4 段目左：発掘調査作業状況

- 1 段目右：遺跡の層序
- 2 段目右：地山直上で検出された遺構
- 3 段目右：平板実測作業の状況
- 4 段目右：発掘調査作業状況



巻首図版 4 銘苅古墓群北C地区

- 1 段目左：銘苅古墓群北C地区と安謝東原北遺跡
- 2 段目左：第5号墓底清掃作業状況
- 3 段目左：第5号墓室内部の状況
- 4 段目左：第5号墓室から見た墓口の状況

- 1 段目右：遺跡周辺の現在の状況
- 2 段目右：第16号墓実測作業の状況
- 3 段目右：第16号墓室の蔵骨器安置状況
- 4 段目右：第16号墓室から見た墓口の状況

序

この報告書は、地域振興整備公団の「那覇新都心土地区画整理事業」に伴って実施された『安謝東原北遺跡』と『銘苅古墓群北地区』の緊急発掘調査の成果を収録したものであります。

今回報告する両遺跡の発掘調査は、2002（平成14）年12月～2003（平成15）年3月の第一次調査と2003（平成15）年5月～同年7月までの第二次調査の工程で実施されました。

安謝東原北遺跡は、那覇新都心地区内の北端に位置し、現在の安謝川には直線距離で約300m程の内陸部にあり、かつての多和田川（タータガーラ）沿いに形成された遺跡です。

調査の結果、グスク時代に比定されると考えられる鍬跡の検出は往時の社会背景を窺い知ることのできる貴重な成果です。

一方、銘苅古墓群北地区は、那覇新都心地区内のほぼ中央を北流する多和田川（タータガーラ）沿いに形成された100基程の墓群です。その中で、「C地区」と称した区域において2基の古墓を対象としました。

調査の結果、琉球王府時代後半における墓制の様相を窺い知ることのできる貴重な成果を得ることができました。特に、墓室内に安置された状況で確認された蔵骨器（ジーン）は往時の死世観を示すと同時に焼き物の視点からも注目される資料です。

今回の調査成果は、当該整備事業地内における遺跡の立地を概観することで先人達の生活の様子を浮かび上げらせ、同時に往時の社会背景をより一層明確に捉えることのできる好資料を提供できたものと考えます。

最後に、本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚、諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待するものであります。また、発掘調査および資料整理にご指導・ご協力頂いた関係各位ならびに調査・報告書作成に従事していただいた皆様へ深く感謝申し上げます。

2004年3月

那覇市教育委員会

教育長 仲田 美加子

報 告 書 抄 録

ふりがな	あ じや あがひ ぼろ きた い せき め かる こ ぼ ぐん						
書 名	安 謝 東 原 北 遺 跡 ・ 銘 苅 古 墓 群 (V)						
副 書 名	那 覇 新 都 心 土 地 区 画 整 理 事 業 に 伴 う 緊 急 発 掘 調 査 報 告 X VII						
巻 次							
シ リ ー ズ 名	那 覇 市 文 化 財 調 査 報 告 書						
シ リ ー ズ 番 号	第 64 集						
編 著 者 名	樋 口 麻 子 ・ 仲 宗 根 啓 ・ バ リ ノ ・ サ ー ゲ ヴ ェ イ 株 式 会 社 (千 葉 博 俊 ・ 齊 藤 崇 人) ・ 土 肥 直 美 ・ 鳥 袋 利 恵 子						
編 集 機 関	那 覇 市 教 育 委 員 会 文 化 財 源						
所 在 地	〒 900-8553 沖 縄 県 那 覇 市 樋 川 2-8-8 TEL 098-891-3501						
発 行 年 日	西 曆 2004年 3月 15日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
あ じや あがひ ぼろ きた い せき 安 謝 東 原 北 遺 跡	おきなわけん なほし 沖 縄 県 那 覇 市 おきなわ だじや 大 字 安 謝 こあがひ ぼろ 小 字 東 原	47201	26度 14分 00秒	127度 41分 47秒	20021202 ～ 20030331 (第一次調査)	1,400㎡	地域振興整備 備公園の土 地区画整理 事業に伴う 緊急発掘調 査
めいかる こぼ ぐん 銘 苅 古 墓 群 きた い せき 北 C 地区					20030506 ～ 20030731 (第二次調査)	100㎡	
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
安 謝 東 原 北 遺 跡	包 蔵 地	グスク時代 (中世相当期)	溝状遺構 水溜状遺構 炭溜り遺構 土留め状遺構 ピット		石器 軽石 土器 カムイヤキ窯跡器 外国産陶磁器		
銘 苅 古 墓 群 北 C 地区	古 墓	近 世	掘込墓		蔵骨器 銭貨 沖縄産陶器 陶質土器 土器 円盤状製品		

例 言

- 1 本報告書は、那覇市教育委員会が地域振興整備公団の委託を受けて、2002（平成14）年度および2003（平成15）年度に実施した『安謝東原北遺跡』と『銘苅古墓群北C地区』の緊急発掘調査の成果を収録したものである。
- 2 安謝東原北遺跡の石器等の石質同定は、神谷厚昭氏（元真和志高等学校教諭）に依頼した。記して感謝申しあげる。
- 3 安謝東原北遺跡「附編1 安謝東原北遺跡の自然科学分析」・「附編2 安謝前原北遺跡の自然科学分析」は、バリノ・サーヴェイ株式会社にまとめて頂いた。記して感謝申し上げます。
- 4 銘苅古墓群（V）「附編1 銘苅古墓群北C地区第16号墓出土の人骨」・「附編2 タカマサリ古墓群出土の人骨」は、土肥直美氏および島袋利恵子氏にまとめて頂いた。記して感謝申し上げます。
- 5 本書に示した座標及び緯度・経度は、日本測地系である。
- 6 巻首図版1、安謝東原北遺跡 図版1、銘苅古墓群（V） 図版1は、国土地理院発行（2003年2月撮影）の写真を使用した。
- 7 巻首図版2は、国土地理院発行（1993年撮影）の写真を使用した。
- 8 安謝東原北遺跡及び銘苅古墓群（V）の第1図に掲載した那覇市全図は、平成9年5月1日 国土地理院発行の「那覇」1：50,000を縮小、複製して使用した。
- 9 安謝東原北遺跡及び銘苅古墓群（V）の第2図に掲載した那覇市全図は、平成15年8月10日国土地理院発行の「那覇」1：25,000を縮小、複製して使用した。
- 10 安謝東原北遺跡及び銘苅古墓群（V）の第3図は、1993（平成5）年3月那覇市都市計画部都市計画課作成の「那覇市全図」の一部を複製して使用した。
- 11 安謝東原北遺跡及び銘苅古墓群（V）の第4図は、米軍作成地形図（1947・1948年撮影の航空写真を元に1948・1949・1951年作図）を複製して使用した。

- 12 安謝東原北遺跡及び銘苺古墓群（V）の第5図は、那覇市企画部市史編集室『那覇市史 那覇の民俗 第2巻中の7』昭和54年1月 付録「旧真和志の歴史・民俗地図を複製して使用した。
- 13 安謝東原北遺跡の第6図及び銘苺古墓群（V）の第6・7図は、1990（平成2）年地域振興整備公団作成の「那覇新都心開発整備事業現況図」を複製して使用した。
- 14 本報告書の編集は、非常勤職員の協力を得て樋口と仲宗根が行った。執筆分担を以下に示す。

安謝東原北遺跡

仲宗根啓 第Ⅰ章 第Ⅲ～Ⅶ章

樋口麻子 第Ⅱ章

銘苺古墓群（V）

仲宗根啓 第Ⅰ章～第Ⅲ・Ⅳ章 第Ⅴ章2～6 第Ⅵ章

樋口麻子 第Ⅱ章 第Ⅴ章1

- 15 成果の記録を下記のメンバーで行った。

洗浄・注記・接合分類・集計：請盛智秋・金武綾子・内間浩子・大城ますみ・山城めぐみ

東江なおみ・喜瀬リサ・山下美也子・伊集尚子・金城薫・座安知子

実測：内間浩子・請盛智秋・金武綾子

トレース：内間浩子・請盛智秋

復元・補強：大城ますみ・山城めぐみ

表・挿図作成：内間浩子・請盛智秋・金武綾子・大城ますみ・山城めぐみ・東江なおみ

拓本：大城ますみ・山城めぐみ・東江なおみ

写真撮影・現像・焼付・図版作成：請盛智秋・金武綾子・山城めぐみ・平野友加里

発掘調査指導：請盛智秋・金武綾子・内間浩子（非常勤職員）

- 16 遺物実測図と写真図版の番号は一致するように配置している。

- 17 出土した資料は、那覇市教育委員会文化財課で保管している。

安謝東原北遺跡・銘苺古墓群 (V)

目 次

- 巻首図版1 那覇新都心と遺跡の位置 (2003年2月撮影 1:10,000)
巻首図版2 那覇新都心と遺跡の位置 (1993年撮影 1:10,000)
巻首図版3 安謝東原北遺跡
巻首図版4 銘苺古墓群北C地区

序

報告書抄録

例言

安謝東原北遺跡

第I章 調査に至る経緯	1
第II章 遺跡の位置と環境	1
第III章 調査経過と調査組織	7
第1節 調査経過	7
第2節 調査組織	9
第IV章 層序	11
第V章 遺構	12
第VI章 遺物	28
1. 石器、軽石	28
2. 土器	28
3. カムイヤキ窯須恵器	28
4. 外国産陶磁器	28
第VII章 総括	33
附編1 安謝東原北遺跡の自然科学分析	
附編2 安謝前原北遺跡の自然科学分析	

挿図目次

第1図	那覇市の位置と遺跡の位置	2	第10図	ビット平面図2	18
第2図	那覇市周辺の主な遺跡	3	第11図	ビット平面図3	19
第3図	那覇新都心地区内の遺跡概略分布	4	第12図	ビット断面図1	20
第4図	那覇新都心地区内の地形と遺跡の概略分布	5	第13図	ビット断面図2	21
第5図	旧真和志の歴史・民俗地図	6	第14図	ビット断面図3	22
第6図	安謝東原北遺跡グリッド設定	10	第15図	ビット断面図4	23
第7図	遺跡の層序	13	第16図	ビット断面図5	24
第8図	遺跡の平面図	15	第17図	石器、軽石	30
第9図	ビット平面図1	17	第18図	出土遺物1	31
			第19図	出土遺物2	32

挿表目次

第1表	ビット計測一覧	12	第3表	石器、軽石計測一覧	29
第2表	掲載遺物一覧	28	第4表	出土遺物観察一覧1	29
			第5表	出土遺物観察一覧2	32

図版目次

図版1	那覇新都心と遺跡の位置
図版2	安謝東原北遺跡：遺跡の全景
図版3	安謝東原北遺跡：発掘調査の状況
図版4	安謝東原北遺跡：遺跡の層序
図版5	安謝東原北遺跡：検出された遺構の状況①
図版6	安謝東原北遺跡：検出された遺構の状況②
図版7	安謝東原北遺跡：出土遺物の状況
図版8	安謝東原北遺跡：作業の状況
図版9	石器、軽石
図版10	出土遺物1
図版11	出土遺物2

銘苅古墓群V（北C地区）

第I章 調査に至る経緯	61
第II章 遺跡の位置と環境	61
第III章 調査経過と調査組織	68
第1節 調査経過	68
第2節 調査組織	70
第IV章 遺構	71
1. 第5号墓	71
2. 第16号墓	71
第V章 遺物	71
1. 蔵骨器	75
2. 銭貨	79
3. 沖縄産陶器	79
4. 陶質土器	79
5. 土器	79
6. 円盤状製品	79
第VI章 総括	82
附編1 銘苅古墓群北C地区第16号墓出土の人骨	
附編2 タカマサリ古墓群出土の人骨	

挿図目次

第1図	那覇市の位置と遺跡の位置……………62	第7図	銘苅古墓群北C地区 第5号墓・第16号墓……………72
第2図	那覇市内の主な古墓群……………63	第8図	第5・6号墓実測図……………73
第3図	那覇新都心地区内の遺跡概略分布……………64	第9図	第16号墓実測図……………74
第4図	那覇新都心地区内の地形と 遺跡の概略分布……………65	第10図	無頸甕形蔵骨器、有頸甕形蔵骨器、 軒付甕形蔵骨器……………78
第5図	旧真和志の歴史・民俗地図……………66	第11図	銭貨、沖縄産陶器、陶質土器、 土器、円盤状製品……………80
第6図	銘苅古墓群北地区……………67		

挿表目次

第1表	遺物出土一覧……………71
第2表	蔵骨器分類表……………76
第3表	蔵骨器観察一覧……………77
第4表	第16号墓出土遺物観察一覧……………81

図版目次

図版1	那覇新都心と遺跡の位置
図版2	銘苅古墓群北C地区：遺跡の全景
図版3	銘苅古墓群北C地区：第5号墓の状況
図版4	銘苅古墓群北C地区：第5号墓の状況
図版5	銘苅古墓群北C地区：第16号墓の状況
図版6	銘苅古墓群北C地区：第16号墓の状況
図版7	銘苅古墓群北C地区：第16号墓の状況
図版8	作業の安全祈願と安謝東原北遺跡及び銘苅古墓群北C地区調査メンバー
図版9	蔵骨器
図版10	蔵骨器
図版11	銭貨、沖縄産陶器、陶質土器、土器、円盤状製品

安謝東原北遺跡

安謝東原北遺跡発掘調査報告書

第Ⅰ章 調査に至る経緯

本遺跡の所在する一帯は、第二次大戦後の1953（昭和28）年米軍によって接収され、1987（昭和62）年に全域が返還された地域である。その後同地域は、一般に「天久解放地」と称され、現在では那覇新都心として新しい街造りが地域振興整備公団（以下、公団）によって進められている。その面積は約214ヘクタール（約60万坪）もの広大な土地である。

さて、同地区には九遺跡の所在が確認されていた。九遺跡の発掘調査は、土地区画整理事業を進める公団から委託を受けた那覇市教育委員会（以下、市教委）により平成2年7月から開始された。2004年3月現在「那覇新都心」地区内には21遺跡が所在している（第3・4図）。

本遺跡は、平成14年度、公団による造成作業中にその存在が確認されたものである。

土地区画整理事業地内に展開する本遺跡の取り扱いについては、公団と市教委との間で調整・協議が行われ、記録保存の為の緊急発掘調査が必要であるとの結論に達し、平成14年12月から発掘調査が実施された。

【参考文献】

『那覇市史 資料篇第3巻4 戦後新聞集成2』 那覇市企画部市史編集室 1983年3月

『写真でつづる 那覇 戦後50年前後 1945—1995』 那覇市文化局歴史資料室 1996年3月

『那覇新都心』 地域振興整備公団

『銘苅古墓群（Ⅲ）』 那覇市教育委員会 2001年3月

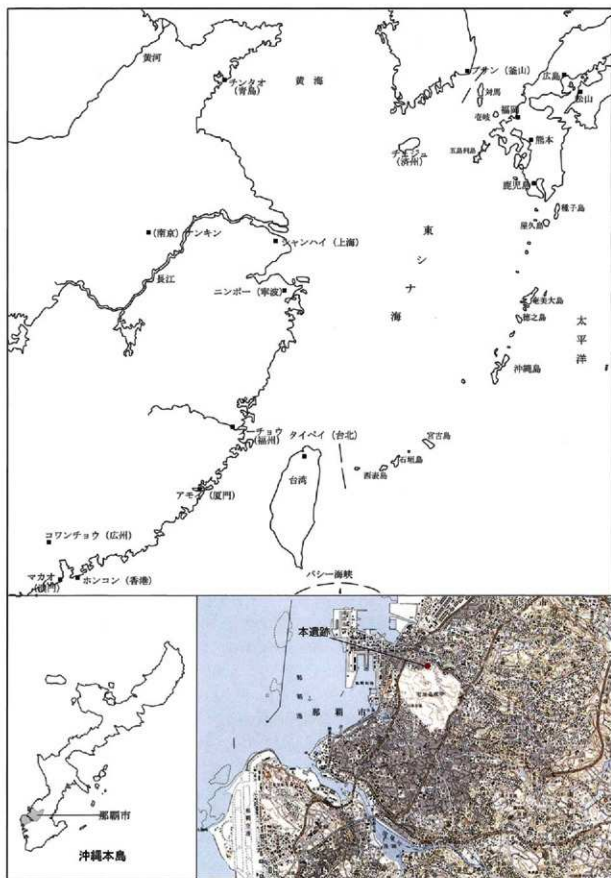
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本遺跡の所在する沖縄県那覇市は沖縄本島の南西部に位置し（第1図）、面積38.99平方km、総人口307,128人（2004年9月現在）を擁する県庁所在地都市である。本市は東中国海に西面し、東側に弁ヶ嶽・首里城付近を頂点と台地がある。南側には小塚台地、北側は天久台地がある。

現在、那覇市においては本市西側の県庁周辺地域に企業や官公庁が集中しているが、本市北西側にあった米軍基地が返還されたことに伴い、その跡地が「那覇新都心」として開発されている。そこには、大型店舗が建ち並び、新たな中心街として脚光を浴びている。

今回報告する安謝東原北遺跡は、この「新都心」の中にある（第2・3図）。

新都心の中を、南から北に向けて銘苅川と大湾川が流れている（第4図）。両河川はスグルクガ一付近で合流し、多和田川と名前を変えて、安謝川へと連なり海へと注がれる。同地区内には、現在21遺跡が確認されているが、その殆どは、これら河川の周辺に広がっている。河川沿いの台地には、銘苅原遺跡や安謝前東原遺跡、安謝前原遺跡など沖縄貝塚時代中期（縄文時代晩期相当）から16世紀にかけての遺跡がある。両岸の崖沿いには銘苅古墓群など、15世紀から近代に至るまで存在した古墓群がある。

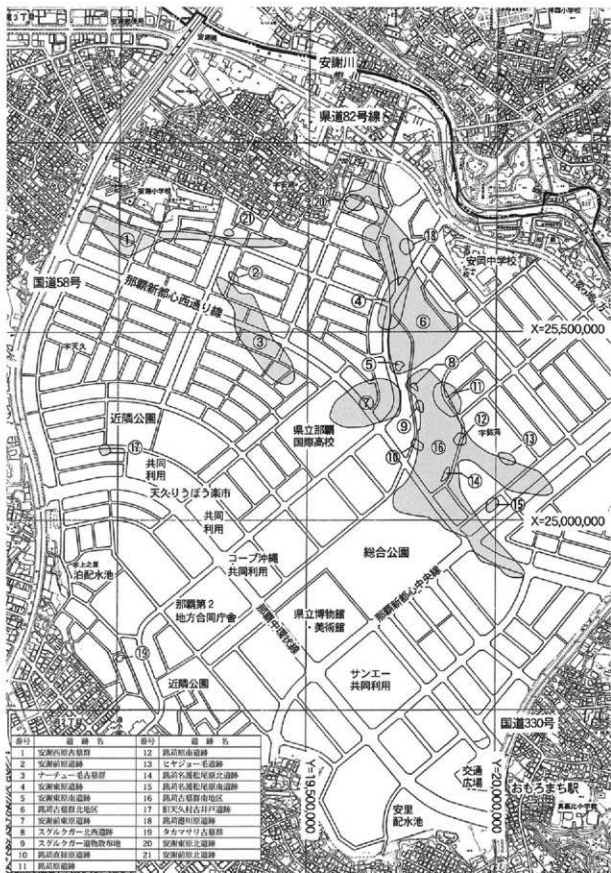


第1図 那覇市の位置と遺跡の位置

1 大塚遺跡	36 湯島遺跡	51 西新井アスロ
2 大塚東遺跡	37 大塚西遺跡	52 西新井アスロ遺跡
3 大塚北遺跡	38 ニュー市街跡(西側)	53 西新井アスロ遺跡
4 大塚南遺跡	39 大塚南遺跡	54 西新井アスロ遺跡
5 大塚東遺跡	40 大塚南遺跡	55 西新井アスロ遺跡
6 ミヤコエ遺跡	41 大塚南遺跡	56 西新井アスロ遺跡
7 大塚アスロ	42 大塚南遺跡	57 西新井アスロ遺跡
8 大塚アスロ	43 大塚南遺跡	58 西新井アスロ遺跡
9 大塚南遺跡	44 大塚南遺跡	59 西新井アスロ遺跡
10 大塚南遺跡	45 大塚南遺跡	60 西新井アスロ遺跡
11 大塚南遺跡	46 大塚南遺跡	61 西新井アスロ遺跡
12 大塚南遺跡	47 大塚南遺跡	62 西新井アスロ遺跡
13 大塚南遺跡	48 大塚南遺跡	63 西新井アスロ遺跡
14 大塚南遺跡	49 大塚南遺跡	64 西新井アスロ遺跡
15 大塚南遺跡	50 大塚南遺跡	65 西新井アスロ遺跡
16 大塚南遺跡	51 大塚南遺跡	66 西新井アスロ遺跡
17 大塚南遺跡	52 大塚南遺跡	67 西新井アスロ遺跡
18 大塚南遺跡	53 大塚南遺跡	68 西新井アスロ遺跡
19 大塚南遺跡	54 大塚南遺跡	69 西新井アスロ遺跡
20 大塚南遺跡	55 大塚南遺跡	70 西新井アスロ遺跡
21 大塚南遺跡	56 大塚南遺跡	71 西新井アスロ遺跡
22 大塚南遺跡	57 大塚南遺跡	72 西新井アスロ遺跡
23 大塚南遺跡	58 大塚南遺跡	73 西新井アスロ遺跡
24 大塚南遺跡	59 大塚南遺跡	74 西新井アスロ遺跡
25 大塚南遺跡	60 大塚南遺跡	75 西新井アスロ遺跡
26 大塚南遺跡	61 大塚南遺跡	76 西新井アスロ遺跡
27 大塚南遺跡	62 大塚南遺跡	77 西新井アスロ遺跡
28 大塚南遺跡	63 大塚南遺跡	78 西新井アスロ遺跡
29 大塚南遺跡	64 大塚南遺跡	79 西新井アスロ遺跡
30 大塚南遺跡	65 大塚南遺跡	80 西新井アスロ遺跡
31 大塚南遺跡	66 大塚南遺跡	81 西新井アスロ遺跡
32 大塚南遺跡	67 大塚南遺跡	82 西新井アスロ遺跡
33 大塚南遺跡	68 大塚南遺跡	83 西新井アスロ遺跡
34 大塚南遺跡	69 大塚南遺跡	84 西新井アスロ遺跡
35 大塚南遺跡	70 大塚南遺跡	85 西新井アスロ遺跡

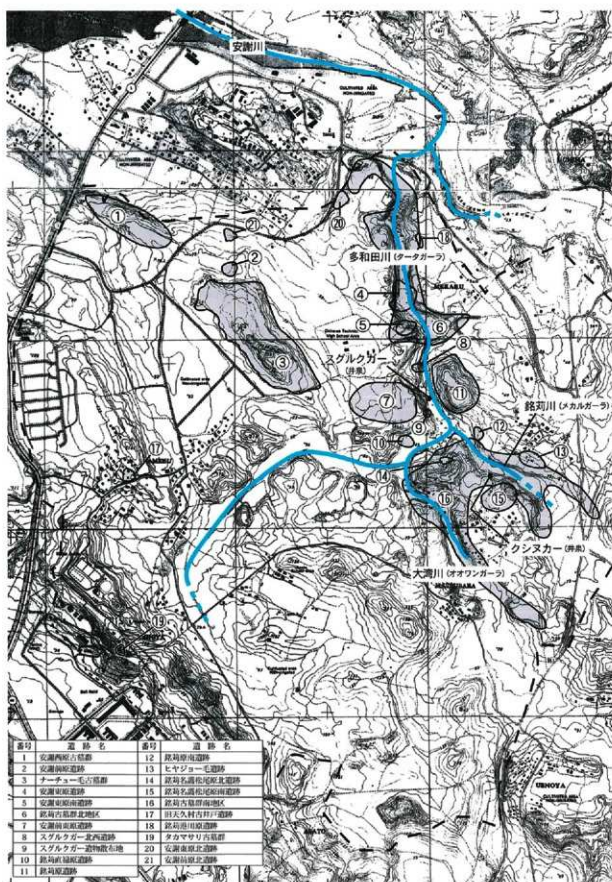


第2図 那覇市周辺の主な遺跡



第3図 那覇新都心地区内の道路概略分布

S 1 : 10,000



第4図 那覇新都心地区内の地形と遺跡の概略分布

S 1 : 10,000



第5図 旧真和志の歴史・民俗地図

S 1 : 10,000

安謝東原北遺跡は、那覇市大字安謝小字東原の開けた緩斜面に所在する。15世紀中頃の地図によれば、かつてこの一帯まで入江となっており、遺跡から海を臨むこともできたと思われる。

1947・1948年頃の米軍地図や昭和初期の民俗地図でみると、遺跡は安謝村の南東のはずれに位置する（第5・6図）。

やや離れた東側の崖下には多和田川が流れ、その崖沿いには、今回合わせて報告する銘苅古墓群（北地区）が所在する。

現在は次々と建物が建築され、新興住宅地となっており、埋め立てによって海岸線も遠のき、往時の面影は失われている。

【参考文献】

1985 目崎茂和「第一編 第一章 第二節 古地理」『那覇市史 通史篇 第一巻』

那覇市企画部文化振興課

第三章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

本遺跡は、平成14年度（2002年4月）、公団による造成工事中に発見されたものである。その後、公団との調整を経て平成14（2002）年12月から市教委によって本発掘調査が開始された。

以下、調査経過の概略を示す。

第一次調査

2002（平成14）年

- 12月9日 遺跡の調査範囲について、バックホーを使用した表土剥ぎ作業を開始。
- 11日 遺物包含層の厚さが、遺跡の西側で1.5m程度堆積することを確認。
- 12日 雨天のため室内作業を行う
- 13日 遺跡のセンターラインを仮設定する。
- 16日 人力による表面清掃作業を開始する。
- 18日 表面清掃ほぼ終了。グリッド設定作業を開始する。
- 20日 グリッド杭については、南北方向をアルファベット、東西方向を算用数字で表し、北東隅の杭をグリッド名とする（第6図）。
- 24日 調査区西側をメインに掘下げ作業を進行する。
- 27日 本年の発掘調査を終了

2003（平成15）年

- 1月6日 本年の発掘調査を開始。各グリッドの掘下げ作業を行う。
- 8日 遺跡周辺に水準点移動作業を行う。
- 9日 基本層序の確認作業を開始
- 16日 K・L-21・22、M-21グリッドの出土遺物について、写真撮影及びドット図面・レベルリング作業を行って取り上げる。
- 17日 M-21グリッドトレンチ北側は、地山面までの掘下げ終了。
- 22日 K-22グリッド、岩盤露出
- 2月4日 平板実測にて遺物出土状況図（ドット図）を作成。
- 5日 M-21グリッド北側断面図作成開始。
- 7日 平板実測にて調査区全体図の作成を開始。
- 12日 M-0-21グリッド西側壁の分層作業を継続する。
- 18日 J-M-22グリッド西側アゼの掘下げ作業を行う。
- 21日 調査区に4点の座標設置のため、測量作業を行う。
- 3月3日 J-L-20～23グリッド付近、検出遺構の半蔵作業を行う。
- 7日 J-N-20～23グリッド、遺構（ピット）の数量確認。現在84基。
- 13日 N・O-21・22グリッド付近、炭溜り遺構の精査作業を行う。
- 17日 M-23グリッド、地山面までの掘下げ作業を継続。鍛跡（？）が検出される。
- 19日 L-23グリッド南側アゼ掘下げ作業。第Ⅲ層中よりカムイ窯須恵器が初めて出土。
- 27日 調査区全体撮影を行う。
- 31日 第一次調査を終了する。

第二次調査

2003（平成15）年

- 5月6日 本日より第二次調査を開始する。堆積した土砂の除去作業を行う。
- 16日 23グリッドライン土層断面図作成作業を開始。
- 12日 O-22グリッド、炭溜り遺構を完掘。
- 30日 K-21、M-23グリッド、検出遺構詳細図作成作業。
- 6月3日 台風5号の影響で、現地作業を中断し室内作業を行う。
- 10日 M-27、M-24、L-25グリッド、地山面検出のための掘下げ作業を行う。
- 13日 M・N-28～31グリッド、昨夜の雨で溜まった水の除去作業を行って、精査作業を行う。
- 20日 N-28・30・31・M-30グリッド、層序ごとに掘下げ作業を実施。
- 27日 調査状況の写真撮影を行う。
- 7月14日 M-O-21～23グリッド、遺構検出状況平面実測作業。
- 7月23日 J-P-20～23グリッド、コンター図作成作業を実施。
- 7月31日 H・I-21グリッド、溝状硫黄の平面実測。
調査区周辺の片づけを行って、現地調査を終了する。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

調査責任者 那覇市教育委員会 教育長 仲田美加子（平成14・15年度）

調査責任者及び調査総括 文化財課 課 長 金武 正紀（平成14年度）
 " " " 古塚 達朗（平成15年度）

調査事務 那覇市教育委員会 " 主 幹 喜納 曙（平成15年度）
 " " " 係 長 "（平成14年度）
 " " " 主任 主事 上原 善英（平成14・15年度）

調査担当 那覇市教育委員会 文化財課 主任専門員 島 弘
 " " " 専門員 玉城 安明
 " " " " 仲宗根 啓
 " " " " 樋口 麻子
 " " " " 當路 由嗣
 " " " 調査補助員 譜久里昌代（平成14年度）
 " " " " 山川由美子（ " ）
 " " " " 栗山 初美（ " ）
 " " " " 比嘉 君子（ " ）
 " " " " 杉村千重美（ " ）

第一次発掘調査作業員（平成14年度）

井上雅江 上江洲由昇 大城輝子 大嶺愛子 喜瀬彰 儀間哲治 國仲哲夫 崎山乗一郎
 島崎雄 棚原三明 中松雪乃 永吉弘子 西島本成子 比嘉武 比嘉千賀子 古堅かつえ
 前田孜 安田敏夫 湧川啓子

第一次発掘調査世話人（平成14年度）

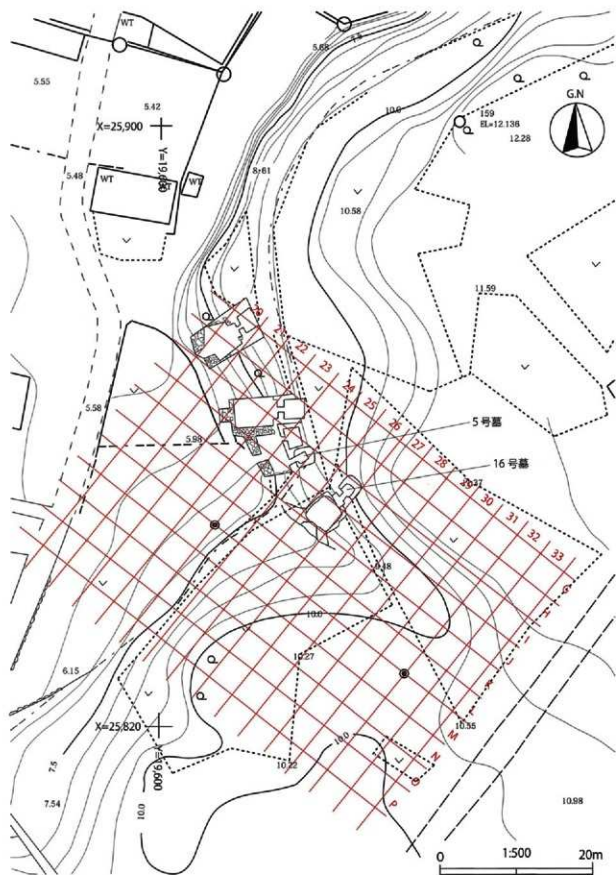
大城ますみ

第二次発掘調査作業員（平成15年度）

上江洲由昇 大城輝子 大嶺愛子 儀間哲治 崎山乗一郎 玉城利江子 玉城乾一郎
 知念キヨ子 桃原佐恵美 中松雪乃 永吉弘子 比嘉武 比嘉千賀子 樋口光子
 古堅かつえ 前田孜 安田敏夫 湧川啓子

第二次発掘調査世話人（平成15年度）

大城ますみ



第6図 安謝東原北遺跡グリッド設定

第IV章 層序

本遺跡の層序は、視覚等による色調の違いや、混入物の差異などによって第Ⅰ～第Ⅹ層に大別した。さらに層によって細分し16枚に細分した（第7図）。以下に各層の特徴を記す。

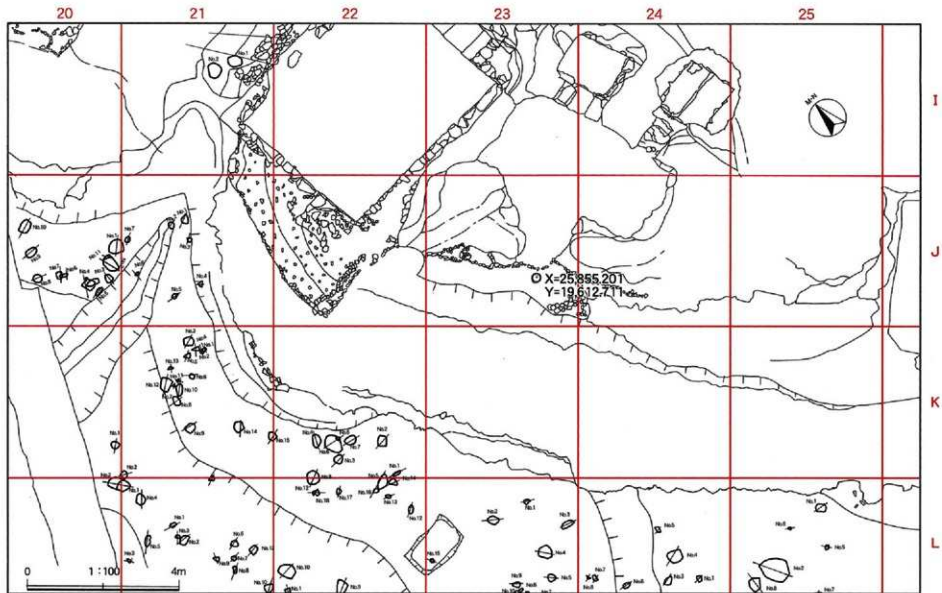
- I 造成による客土。
- II 暗褐色：乾燥すると、バサバサする。
- III 本層上面は不整合で、一部クワ跡状、溝状の掘り込みなどが見られる。遺構面（文化層）として捉えられる。
- IV 暗茶褐色：直径2～3mmのマンガン、焼土粒を多量に含み、特にザラザラ感が強い。遺物はほとんど見られないが、マンガン、焼土の出土を見る。
- V 淡黒褐色：混入物はIV層と同様マンガン、焼土粒を多く含む。ただ色調は上層に比べ黒味が強い。
- VI a 淡橙褐色：砂質の土層の堆積。層中に水平堆積を呈する、砂のみの状況が見られることから、水の関連で堆積した層準とも考えられる。
- VI b 淡橙褐色：直径3～5mm前後の焼土、マンガン粒が多量に混入する、バサバサした層である。色調は黒味も帯びているが、VI d層よりは明るい。
- VI c 淡橙褐色：上層より明味を帯びる。砂質の土層の堆積状況は、上層と同じ感を呈するが、直径10mm前後のマンガン、焼土粒が多量に混入する。特に層下部にその堆積が顕著。
- VI d 淡橙褐色：直径5mm前後のマーヅ土ブロック、2～3mm前後の焼土粒を若干含む。色調としては、VI b層よりも黒味を帯びる。
- VII 淡黒褐色：若干粘質になる。直径2～3mm前後の焼土粒、マンガン粒を含む。III層、V層と並び黒味を帯びる。
- VII b 淡黒褐色：色調はVII層と同じ基調を呈する。マーヅ土のブロック（直径10mm前後）が多量に混入する。手触りはザラザラ感があり、かなりしまっている層。直径5mm前後のカーボン、焼土、マンガンなども多量に含む。下部においてはその混入が顕著である。焼土粒の堆積が顕著になる部分が見られる。
- VII c 暗褐色土or暗橙褐色：砂質の土層が堆積する。混入物は直径5mm前後の焼土、マーヅ粒子等を若干含む。一部集中する部分が見られるが、全体的には上層より少ない
- VIII 淡橙灰色：砂の堆積が顕著な箇所がみられる。一部IX層の炭が若干混じる。基本的には、粘性を帯びる層準。
- IX 黒褐色：炭が多量に混入する。一部集中する箇所も見られる。直径5～10mm大ものカーボンも見られる。ザラザラ感があるものの、かなり締まっている。
- IX b 暗褐色：IX層の間層的な堆積を示す。カーボンの堆積はほとんど見られない。1mm前後の細い焼土粒、マーヅ土粒の堆積が少量認められる。
- X 暗灰褐色：粘性に富む堆積土。直径1～5mmのカーボン等の混入が認められるが、ほとんど混入物を含まない。

第V章 遺構

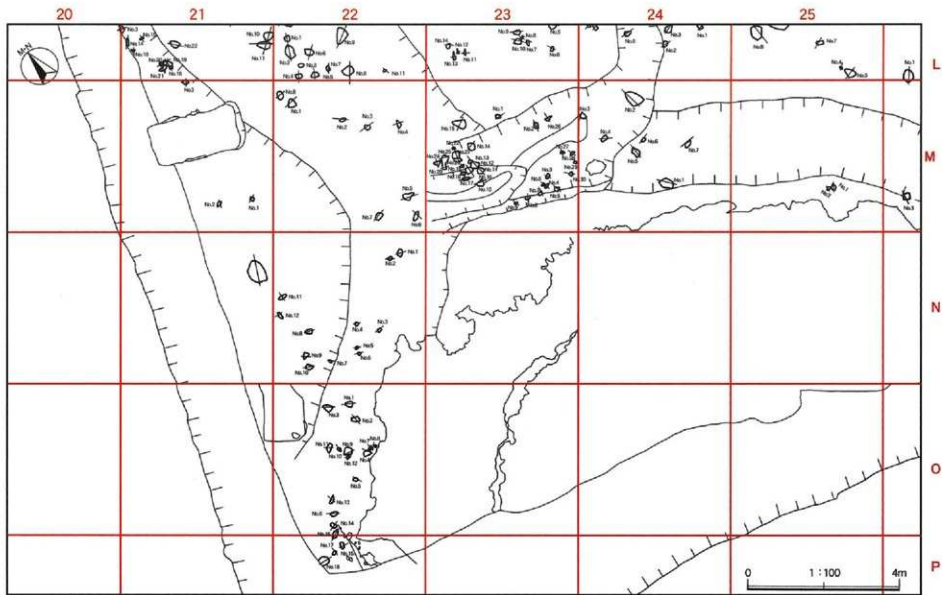
本遺跡から検出された遺構は、溝状遺構・水溜状遺構・炭溜り遺構、土留め状遺構、ピットなど多様である（第8図）。ここでは、ピットについて平面図・断面図・計測一覧を紹介する（第9～16図、第1表）。

第1表 ピット計測一覧

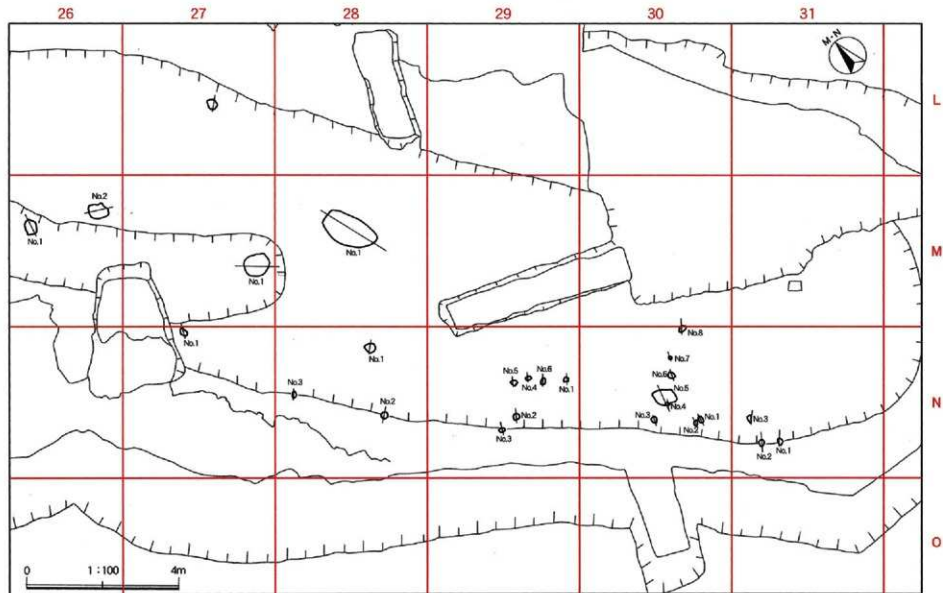
遺構	検出位置	番号	碑図番号 断面図	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形		断面形	長軸方向	出土遺物	備考
							上面	下面				
1	I-21	No.1	第12図	41	34		楕円	楕円		N-25°W		溝No.1畦北側壁
2	I-21	No.2	第12図	42	37		ほぼ円	ほぼ円		N-55°E		溝No.1畦南側壁
3	J-20	No.1	第12図	40	39	7	隅丸三角形	ひょうたん	W字状	N-70°W		銅跡（底穴3）
4	J-20	No.2	第12図	41	30	14	楕円	楕円		N-5°E		
5	J-20	No.3	第12図	24	20	22	ほぼ円	U字状	U字状	N-5°W		
6	J-20	No.4	第12図	36	29	8	いびつ	楕円	W字状	N-48°W		銅跡（底穴3）
7	J-20	No.5	第12図	24	17	10	楕円	楕円	V字状	N-74°E		銅跡
8	J-20	No.6	第12図	15	9	8	いびつ	いびつ	V字状	N-65°W		銅跡
9	J-20	No.7	第12図	22	20	28	円	円	V字状	N-40°E		銅跡
10	J-20	No.8	第12図	22	21	19	円	ほぼ円	鍋底状	N-42°E		
11	J-20	No.9	第12図	32	22	14	楕円	いびつ	W字状	N-90°W		銅跡
12	J-20	No.10	第12図	35	25	20	隅丸長方形	いびつ	V字状	N-72°E		銅跡
13	J-20	No.11	第12図	11	5	2	楕円	—	(鍋底状)	N-47°W		
14	J-21	No.1	第12図	25	21	4	ほぼ円	ほぼ円	鍋底状	N-44°E		
15	J-21	No.2	第12図	18	16	6	円	円	鍋底状	N-43°E		
16	J-21	No.3	第12図	13	10	3	隅丸三角形	隅丸三角形	鍋底状	N-89°W		
17	J-21	No.4	第12図	16	11	2.5	ほぼ隅丸三角形	ほぼ隅丸三角形	(鍋底状)	N-40°E		
18	J-21	No.5	第12図	16	12	4	楕円	楕円	鍋底状	N-75°E		
19	J-21	No.6	第12図	17	9	2	隅丸三角形	隅丸三角形	鍋底状	N-80°W		
20	J-21	No.7	第12図	16	12	8	ほぼ円	楕円	半円状	N-70°E		
21	K-20	No.1	第12図	24	20	37.5	楕円	楕円	U字状	N-45°W		
22	K-20	No.2	第12図	20	13	13	楕円	楕円	V字状	N-35°E		銅跡
23	K-21	No.1	第12図	17	9	2	いびつ	いびつ	鍋底状	N-52°W		
24	K-21	No.2	第12図	10	8	2	いびつ	いびつ	(鍋底状)	N-45°W		
25	K-21	No.3	第12図	25	24	14	円	ほぼ円	鍋底状	N-10°W		
26	K-21	No.4	第12図	20	10	5	隅丸三角形	隅丸三角形	鍋底状	N-45°W		
27	K-21	No.5	第12図	17	13	5	隅丸三角形	いびつ	鍋底状	N-50°W		
28	K-21	No.6	第12図	18	14	7	いびつ	楕円	鍋底状	N-25°W		底穴
29	K-21	No.7	第12図	8	6	2	隅丸三角形	楕円	V字状	N-42°E		銅跡
30	K-21	No.8	第12図	24	18	4	いびつ	楕円	(V字状)	N-5°W		銅跡
31	K-21	No.9	第12図	26	25	10	円	楕円	W字状	N-43°E		銅跡
32	K-21	No.10	第12図	35	21	4	楕円		(W字状)	N-43°E		銅跡
33	K-21	No.11	第12図	12	9	4	ひょうたん	いびつ	V字状	N-40°E		銅跡
34	K-21	No.12	第12図	42	30	8	いびつ	いびつ	(鍋底状)	N-45°E		石英
35	K-21	No.13	第12図	12	6	3	隅丸三角形	隅丸三角形	U字状	N-50°W		
36	K-21	No.14	第12図	25	25	10	ほぼ円	半円	鍋底状	N-5°W		
37	K-21	No.15	第12図	23	21	8	ほぼ円	いびつ	U字状	N-5°W		
38	L-20	No.1	第12図	33	27	42	楕円	隅丸長方形	V字状	N-45°W		銅跡
39	L-20	No.2	第12図	27	26	23	いびつ	いびつ	傾斜	N-20°W		
40	L-21	No.13	第12図	14	13	9	ほぼ円	ほぼ円	U字状	N-48°W		
41	L-20	No.3	第12図	17	8	1	隅丸三角形	隅丸三角形	(鍋底状)	N-25°E		
42	L-21	No.1	第13図	16	13	5	楕円	いびつ	傾斜	N-83°W		
43	L-21	No.2	第13図	28	21	23	楕円	楕円	V字状	N-85°E		銅跡
44	L-21	No.3	第13図	11	10	5	いびつ	楕円	V字状	N-42°W		銅跡
45	L-21	No.4	第13図	30	23	9	楕円	楕円	U字状	N-40°E		石器
46	L-21	No.5	第13図	33	14	7	ほぼ楕円	ほぼ楕円	いびつ	N-45°E		
47	L-21	No.6	第13図	21	18	7	楕円	ほぼ楕円	鍋底状	N-15°W		軽石
48	L-21	No.7	第13図	16	15	4	ほぼ円	ほぼ楕円	鍋底状	N-10°W		
49	L-21	No.8	第13図	19	13	6	いびつ	いびつ	鍋底状	N-40°E		
50	L-21	No.9	第13図	15	12	5	隅丸台形	楕円	鍋底状	N-5°E		



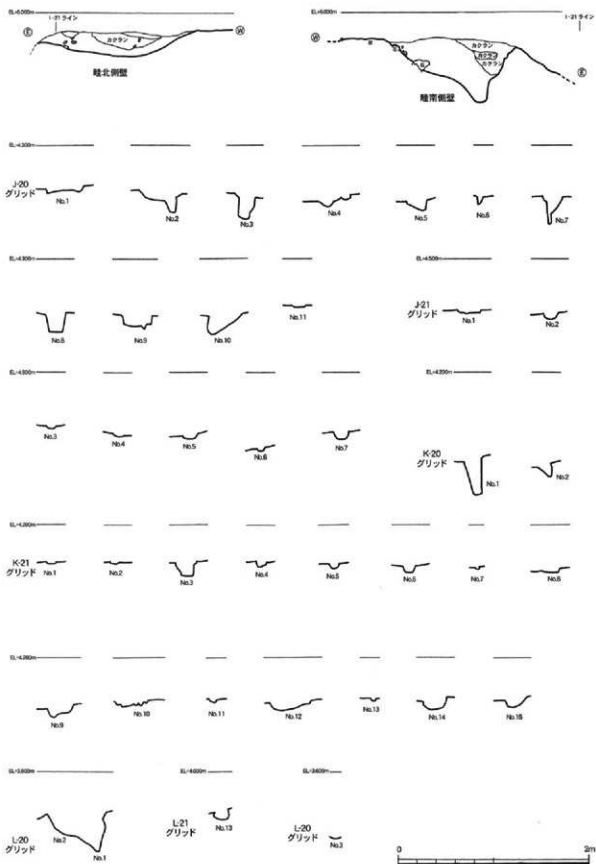
第9図 ビット平面図1



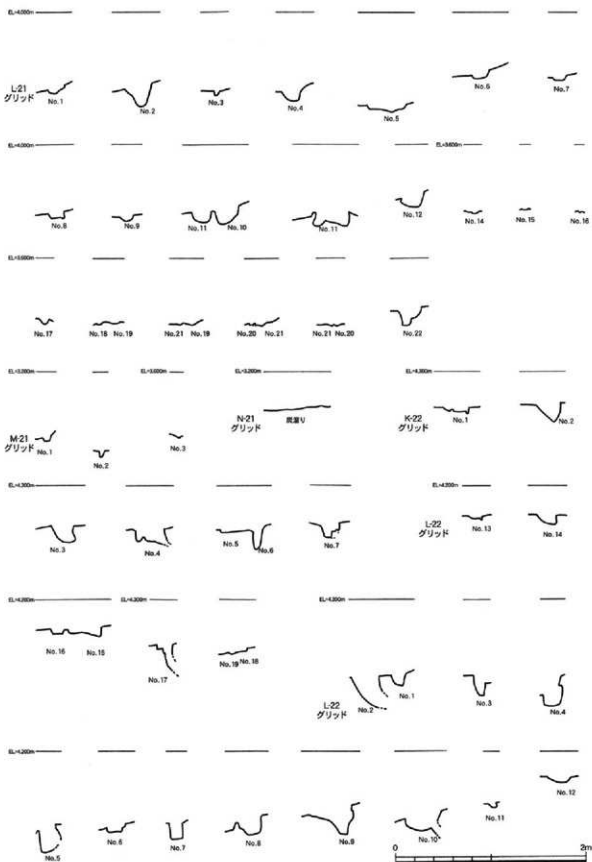
第10図 ビット平面図2 (M23 X = 25.847.222)
Y = 19.607.726



第11図 ビット平面図3 (M31 X=25,827.277
Y=19,632.747)



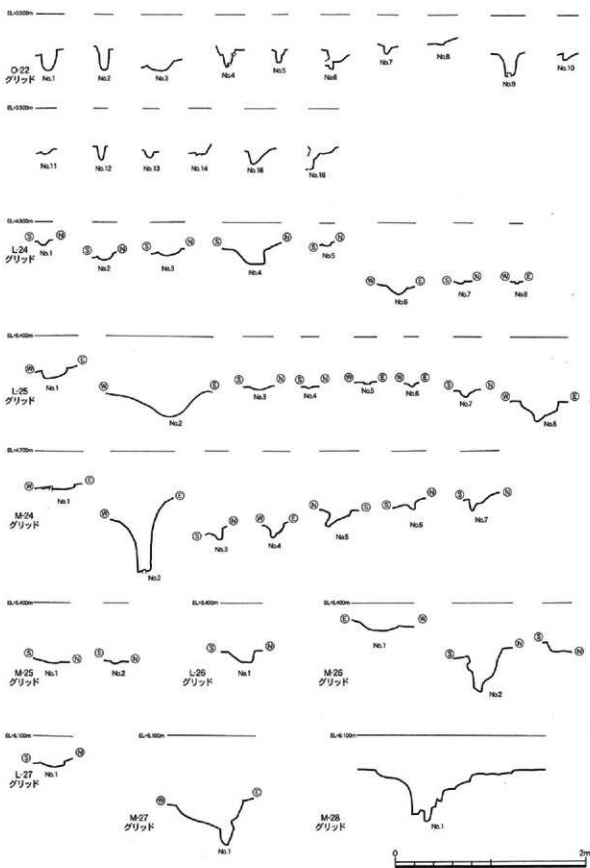
第12図 ビット断面図1



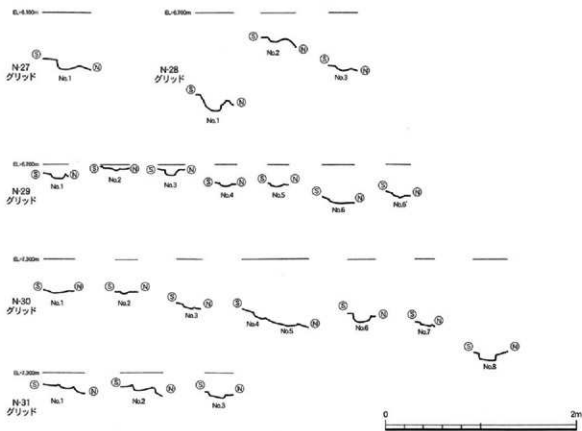
第13図 ビット断面図2



第14図 ビット断面図3



第15図 ピット断面図4



第16図 ビット断面図5

連番	検出位置	番号	綁固番号 断面図	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形		断面形	長軸方向	出土遺物	備考
							上面	下面				
51	L-21	No.10	第13図	25	24	14	ほぼ円	ほぼ楕円	U字状	N-85°E		
52	L-21	No.11	第13図	36	23	14.5	ほぼ楕円	ほぼ楕円	U字状	N-48°W		底穴2
53	L-21	No.12	第13図	26	20	13	楕円	楕円	U字状	N-60°E		
54	L-21	No.14	第13図	11	5	2	ほぼ楕円 台形	楕円	U字状	N-40°E		底穴2
55	L-21	No.15	第13図	9	5	1	楕円三角形	楕円	U字状	N-80°E		
56	L-21	No.16	第13図	8	3	1	楕円三角形	楕円三角形	いびつ	N-55°W	青磁	
57	L-21	No.17	第13図	12	9	5	楕円台形	楕円	U字状	N-15°E		
58	L-21	No.18	第13図	12	6	2	ほぼ楕円	楕円	U字状	N-80°W		
59	L-21	No.19	第13図	26	15	4.5	楕円長方形	楕円長方形	U字状	N-35°W		
60	L-21	No.20	第13図	7	6	2	楕円長方形	楕円長方形	楕圓状	N-5°E		
61	L-21	No.21	第13図	19	12	5	楕円台形	楕円	W字状	N-80°W		
62	L-21	No.22	第13図	25	17	16	楕円	楕円	W字状	N-45°W	石器	
63	M-21	No.1	第13図	11.5	8	4	楕円	楕円長方形	(U字状)	N-0°		
64	M-21	No.2	第13図	13	7	6	台形	楕円	(U字状)	N-85°W		
65	M-21	No.3	第13図	12	6	2	ひょうたん	ほぼ楕円 三角形	(V字状)	N-60°W		銀跡
66	N-21		第13図	61	42	2	楕円	楕円	(楕圓状)	N-20°E	土器	皮溜り
67	K-22	No.1	第13図	26	13	6.5	楕円	楕円	(W字状)	N-77°W		銀跡
68	K-22	No.2	第13図	29	26	20	ほぼ円	いびつ	V字状	N-43°E		銀跡
69	K-22	No.3	第13図	24	22	17.5	円	ほぼ円	U字状	N-42°E		
70	K-22	No.4	第13図	35	23	12	ほぼ楕円	いびつ	(いびつ)	N-17°E		底穴2
71	K-22	No.5	第13図	57	40	3	楕円	楕円	(楕圓状)	N-10°W		
72	K-22	No.6	第13図	11	10	16	いびつ	楕円	V字状	N-89°W		銀跡
73	K-22	No.7	第13図	30	21	14	楕円	楕円	(W字状)	N-75°W		
74	K-22	No.8	第13図	36	32		円	ほぼ円	—	N-42°E		欠
75	L-22	No.13	第13図	15	12	4	楕円	楕円	いびつ	N-73°W		
76	L-22	No.14	第13図	19	18	9	ほぼ円	楕円三角形	U字状	N-83°W		
77	L-22	No.15	第13図	40	24	10.5	楕円	いびつ	楕圓状	N-73°E		底穴2
78	L-22	No.16	第13図	15	12	4.5	楕円	ほぼ円	楕圓状	N-15°W		
79	L-22	No.17	第13図	17	13	22	楕円	ほぼ楕円	(U字状)	N-40°E		
80	L-22	No.18	第13図	14	11	2.5	楕円台形	ほぼ ひょうたん	(楕圓状)	N-80°E		
81	L-22	No.19	第13図	8	6	2	楕円台形	楕円	(U字状)	N-80°E		
82	L-22	No.1	第13図	15	15	13	ほぼ円	ほぼ円	V字状	N-50°W		銀跡
83	L-22	No.2	第13図	28	23	23	楕円	楕円		N-43°E		
84	L-22	No.3	第13図	14	13	16	ほぼ円	楕円	(U字状)	N-48°W		
85	L-22	No.4	第13図	21	16	20	ほぼ半円	ほぼ半円	U字状	N-49°W		
86	L-22	No.5	第13図	17	16	16	楕円	楕円	U字状	N-50°W		
87	L-22	No.6	第13図	25	20	7	楕円	楕円	楕圓状	N-48°W		底穴3?
88	L-22	No.7	第13図	13	12.5	16.5	ほぼ円	円	楕圓状	N-40°E		
89	L-22	No.8	第13図	29	25	16	楕円	楕円	U字状	N-48°W		底穴4?
90	L-22	No.9	第13図	40	26	30	楕円三角形	楕円	V字状	N-42°E		銀跡
91	L-22	No.10	第13図	47	37	17	楕円	ほぼ楕円	U字状	N-48°W		
92	L-22	No.11	第13図	10	6	4	楕円	円	U字状	N-60°W		底穴2
93	L-22	No.12	第13図	24	17	6	楕円	楕円	U字状	N-60°E		
94	L-23	No.1	第14図	16	15	7	ほぼ円	楕円	楕圓状	N-45°W		
95	L-23	No.2	第14図	30	23	28	楕円	楕円	V字状	N-50°W		銀跡
96	L-23	No.3	第14図	32	16	26	楕円	楕円三角形	楕圓状	N-75°W		
97	L-23	No.4	第14図	35	33	24	ほぼ円	ほぼ楕円	(U字状)	N-5°W		
98	L-23	No.5	第14図	14	13	2	円	円	楕圓状	N-47°W		
99	L-23	No.6	第14図	15	7	4	楕円	楕円	楕圓状	N-53°E		
100	L-23	No.7	第14図	17	10	5	楕円台形	楕円	楕圓状	N-20°E		
101	L-23	No.8	第14図	12	8	3	楕円台形	楕円台形	楕圓状	N-75°E		
102	L-23	No.9	第14図	15	11	6	楕円	ほぼ楕円	楕圓状	N-52°W		
103	L-23	No.10	第14図	18	14	14	ほぼ円	ほぼ円	楕圓状	N-20°W		
104	L-23	No.11	第14図	10.5	7	2	楕円台形	楕円三角形	楕圓状	N-18°E		
105	L-23	No.12	第14図	13.5	6	2			V字状	N-20°E		銀跡
106	L-23	No.13	第14図	21.5	6.5	2	楕円	楕円	楕圓状	N-30°E		
107	L-23	No.14	第14図	15	13	9	円	円	U字状	N-40°E		
108	L-23	No.15	第14図	13.5	10	17	楕円	楕円	V字状	N-23°W		銀跡

種番	検出位置	番号	押型番号 断面図	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形		断面形	長軸方向	出土遺物	備考
							上面	下面				
109	M-22	No.1	第14図	17	16	21	ほぼ円	楕円	U字状	N-25°W		
110	M-22	No.2	第14図	19	13	16	ほぼ楕円	楕円	V字状	N-60°W	土器	銀跡
111	M-22	No.3	第14図	16.5	16.5	12	円	円	鍋底状	N-48°W		
112	M-22	No.4	第14図	24	10	20	楕円	円	U字状	N-15°E		
113	M-22	No.5	第14図	28	19.5	5	いびつ	楕円	V字状	N-85°W		銀跡
114	M-22	No.6	第14図	32	13	9.5	楕円	楕円	W字状	N-65°E		銀跡
115	M-22	No.7	第14図	24	14	21.5	楕円	いびつ	U字状	N-75°E		
116	M-22	No.8	第14図	23.5	20.5	15.5	楕円	楕円	V字状	N-35°E		銀跡 底穴4
117	M-23	No.1	第14図	17	12	14.5	楕円	楕円	W字状	N-18°W		
118	M-23	No.2	第14図	20	18	7	楕円	楕円	W字状	N-18°E		
119	M-23	No.3	第14図	16.5	8	2.5	楕丸三角形	楕丸三角形	V字状	N-78°E		銀跡
120	M-23	No.4	第14図	17	11	3	楕円	いびつ	U字状	N-90°W		
121	M-23	No.5	第14図	14	7	3	ほぼ楕円	いびつ	(V字状)	N-90°W		銀跡
122	M-23	No.6	第14図	13	5	2	楕丸三角形	楕丸三角形	(V字状)	N-70°W		銀跡
123	M-23	No.7	第14図	10	6	2	楕丸台形	楕丸台形	V字状	N-84°W		銀跡
124	M-23	No.8	第14図	14	7	4	楕円	ほぼ楕円	V字状	N-65°W		銀跡
125	M-23	No.9	第14図	11	6	2	楕円	いびつ	(V字状)	N-80°W		銀跡
126	M-23	No.10	第14図	20	19	10	ほぼ円	ほぼ半円	(V字状)	N-75°E		銀跡
127	M-23	No.11	第14図	20	17	4	ほぼ四角	楕丸三角形	鍋底状	N-40°E		
128	M-23	No.12	第14図	22	19	8	ほぼ円	円	鍋底状	N-55°W		
129	M-23	No.13	第14図	21	10	1.5	ほぼ楕丸三角形	ほぼ楕丸三角形	鍋底状	N-60°W		
130	M-23	No.14	第14図	22	19	39	ほぼ円	楕円	U字状	N-5°W		
131	M-23	No.15	第14図	35	25	4	いびつ	楕円	(V字状)	N-48°W		銀跡
132	M-23	No.16	第14図	17	17	9	いびつ	楕円	U字状	N-90°W		
133	M-23	No.17	第14図	25	10	16	ひょうたん	ひょうたん	(U字状)	N-68°W		
134	M-23	No.18	第14図	19	7	2	ほぼ楕円	ほぼ楕円	V字状	N-84°W		銀跡
135	M-23	No.19	第14図	19	10	3	ほぼ楕円	ほぼ楕円	半円状	N-70°W		
136	M-23	No.20	第14図	24	10	1	ほぼ楕円	ほぼ楕円	(鍋底状)	N-75°W		
137	M-23	No.21	第14図	25	20	3.5	いびつ	楕円	U字状	N-88°W		
138	M-23	No.22	第14図	11	7	1.5	台形	楕円	(V字状)	N-40°W		銀跡
139	M-23	No.23	第14図	21	11	8	楕丸長方形	楕丸長方形	鍋底状	N-41°E		
140	M-23	No.24	第14図	19	13	10.5	楕丸三角形	いびつ	U字状	N-45°W		
141	M-23	No.25	第14図	27	17	9	楕円	楕円	(V字状)	N-75°E		銀跡
142	M-23	No.26	第14図	17	10	3	半円	楕丸三角形	V字状	N-90°W		銀跡
143	M-23	No.27	第14図	12.5	7	1	半円	楕丸三角形	(V字状)	N-75°W		銀跡
144	M-23	No.28	第14図	14	9	4	半円	楕丸三角形	W字状	N-83°W		銀跡
145	M-23	No.29	第14図	11	6	4	楕丸三角形	楕丸三角形	(V字状)	N-0°		銀跡
146	M-23	No.30	第14図	19	10	2	楕円	楕円	(V字状)	N-80°W		銀跡
147	N-22	No.1	第14図	20	17	11	いびつ	楕円	U字状	N-25°E		
148	N-22	No.2	第14図	13	12	8	ほぼ円	いびつ	V字状	N-50°W		銀跡
149	N-22	No.3	第14図	13	11	25	円	楕円	U字状	N-50°W		
150	N-22	No.4	第14図	12	10	23	ほぼ円	ほぼ円	U字状	N-5°W		
151	N-22	No.5	第14図	10	9	21	円	ひょうたん	U字状	N-63°E		
152	N-22	No.6	第14図	10	9	6	円	ほぼ楕円	U字状	N-5°W		
153	N-22	No.7	第14図	9	8	8	円	半円	U字状	N-45°W		
154	N-22	No.8	第14図	14.5	10	32	楕円	円	傾斜	N-50°E		
155	N-22	No.9	第14図	20	13	9	いびつ	円	U字状	N-60°W		
156	N-22	No.10	第14図	21.5	12	14	楕円	円	V字状	N-50°W		銀跡
157	N-22	No.11	第14図	21	11	4	楕丸三角形	楕円	U字状	N-89°W		
158	N-22	No.12	第14図	17	7	3.5	楕円	楕円	U字状	N-10°E		
159	O-22	No.1	第15図	20	17	19	円	いびつ	U字状	N-0°		底穴2
160	O-22	No.2	第15図	11.5	10	22.5	楕円	円	U字状	N-10°W		
161	O-22	No.3	第15図	28	20	8	楕円	楕円	U字状	N-48°W		
162	O-22	No.4	第15図	20	18	19	ほぼ楕円	ほぼ円	(U字状)	N-10°W		
163	O-22	No.5	第15図	10	10	12	楕丸台形	楕円	U字状	N-0°		
164	O-22	No.6	第15図	22	11	17	楕円	いびつ	(W字状)	N-10°W		
165	O-22	No.7	第15図	15	6	6	楕円	楕円	V字状	N-70°E		銀跡
166	O-22	No.8	第15図	11	8	2	楕円	楕円	(V字状)	N-0°		銀跡
167	O-22	No.9	第15図	25	21	23.5	楕円	楕円	U字状	N-28°W		
168	O-22	No.10	第15図	12	9	6	楕円	楕円	(V字状)	N-5°W		銀跡

通番	検出位置	番号	神宮番号 断面図	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形		断面形	長軸方向	出土遺物	備考
							上面	下面				
169	O-22	No 11	第15図	27	13	3	楕円	隅丸三角形	U字状	N-45°E		
170	O-22	No 12	第15図	10	9	13.5	楕円	隅丸三角形	U字状	N-60°E		
171	O-22	No 13	第15図	25	9.5	6	ほぼ楕円	楕円	U字状	N-65°E		
172	O-22	No 14	第15図	17.5	11	4	楕円	楕円	鍋底状	N-15°W		
173	O-22	No 15	第15図	18	11	—	楕円	—	—	N-5°E		欠
174	O-22	No 16	第15図	25	14	14	いびつ	いびつ	V字状	N-75°E		銀跡
175	O-22	No 17	第15図	10	5.5	—	ほぼ隅丸長方形	—	—	N-70°W		欠
176	O-22	No 18	第15図	28	24	22	隅丸台形	円	傾斜	N-82°W		
177	L-24	No 1	第15図	20.5	11	4	楕円	楕円	U字状	N-5°W		
178	L-24	No 2	第15図	16	13	5	楕円	円	U字状	N-85°W		
179	L-24	No 3	第15図	25	16	5	楕円	楕円	U字状	N-68°E		
180	L-24	No 4	第15図	42	39	17	ほぼ円	楕円	鍋底状	N-70°E		
181	L-24	No 5	第15図	15	12	2	ほぼ円	楕円	(U字状)	N-10°W		
182	L-24	No 6	第15図	18.5	14	6.5	楕円	楕円	U字状	N-89°W		
183	L-24	No 7	第15図	14	9	1.5	楕円	隅丸三角形	(U字状)	N-20°W		
184	L-24	No 8	第15図	10	5	1	隅丸三角形	楕円	鍋底状	N-0°W		
185	L-25	No 1	第15図	27	25	8	楕円	楕円	鍋底状	N-80°W		
186	L-25	No 2	第15図	82	62	22	楕円	隅丸三角形	V字状	N-35°W		銀跡 底穴3
187	L-25	No 3	第15図	34	20	3	いびつ	隅丸三角形	V字状	N-20°W		銀跡 底穴2
188	L-25	No 4	第15図	18.5	9	1	楕円	楕円	(鍋底状)	N-25°W		
189	L-25	No 5	第15図	17	10	2	隅丸台形	隅丸三角形	鍋底状	N-65°E		
190	L-25	No 6	第15図	11	10	2	四角	半円	V字状	N-10°W		銀跡
191	L-25	No 7	第15図	18	12	6	楕円	楕円	V字状	N-35°W		銀跡 底穴2
192	L-25	No 8	第15図	40	34	20	ほぼ円	楕円	V字状	N-5°E		銀跡 底穴2
193	M-24	No 1	第15図	36	26	3.5	楕円	ほぼ楕円	鍋底状	N-30°W		
194	M-24	No 2	第15図	40	31	5.5	ほぼ楕円	楕円	U字状	N-5°E		
195	M-24	No 3	第15図	16	9	10	楕円	楕円	V字状	N-35°W		銀跡
196	M-24	No 4	第15図	20	15	9	楕円	楕円	V字状	N-55°W		銀跡
197	M-24	No 5	第15図	26	14	12	いびつ	いびつ	V字状	N-5°E		銀跡
198	M-24	No 6	第15図	13	8	7	楕円	楕円	V字状	N-65°E		銀跡
199	M-24	No 7	第15図	21	12	13	楕円	平楕円	W字状	N-75°E		銀跡
200	M-25	No 1	第15図	19.5	15	1	ひし形	いびつ	傾斜	N-35°E		
201	M-25	No 2	第15図	11	9.5	2	円	ほぼ円	(V字状)	N-75°W		銀跡
202	L-26	No 1	第15図	30	26	11	ほぼ円	ほぼ円	U字状	N-50°E		
203	M-26	No 1	第15図	53	45	7	いびつ	楕円	鍋底状	N-20°W		
204	M-26	No 2	第15図	41	30	39	ほぼ楕円	ほぼ円	V字状	N-27°E		銀跡
205	M-26	No 3	第15図	18	18	6	ほぼ円	楕円	V字状	N-25°E		銀跡
206	L-27		第15図	28	27	5.5	ほぼ円	いびつ	(鍋底状)	N-68°E		
207	M-27	No 1	第15図	71	59	45	ほぼ円	楕円	V字状	N-70°E		底穴2 銀跡
208	M-28	No 1	第15図	146	74	53	楕円	楕円	(いびつ)	N-20°W		
209	N-27	No 1	第16図	26	15	7	楕円	楕円	V字状	N-10°E		銀跡
210	N-28	No 1	第16図	29.5	25	13	ほぼ円	円	U字状	N-50°W		
211	N-28	No 2	第16図	18	17	4	ほぼ円	楕円	鍋底状	N-42°E		
212	N-28	No 3	第16図	18	9.5	3.5	楕円	楕円	V字状	N-35°E		銀跡
213	N-29	No 1	第16図	16	11.5	4	楕円	楕円	鍋底状	N-42°E		
214	N-29	No 2	第16図	20	18	2	ほぼ円	隅丸三角形	W字状	N-35°E		銀跡
215	N-29	No 3	第16図	16	13	6	ほぼ円	ほぼ円	U字状	N-50°W		
216	N-29	No 4	第16図	14	10	2	楕円	楕円	(V字状)	N-65°W		銀跡
217	N-29	No 5	第16図	17	13.5	3	ほぼ円	楕円	V字状	N-45°W		銀跡
218	N-29	No 6	第16図	19	12	3	楕円	楕円	(V字状)	N-42°E		銀跡
219	N-30	No 1	第16図	17	12	2	楕円	楕円	(V字状)	N-10°E		銀跡
220	N-30	No 2	第16図	12	9.5	2	ほぼ円	楕円	V字状	N-15°E		銀跡
221	N-30	No 3	第16図	15	13	2	ほぼ円	円	鍋底状	N-35°W		
222	N-30	No 4	第16図	13	10	3	楕円	楕円	鍋底状	N-80°W		
223	N-30	No 5	第16図	67	40	4	楕円	楕円	(鍋底状)	N-38°W		
224	N-30	No 6	第16図	21	17	8	ほぼ円	ほぼ円	U字状	N-46°W		
225	N-30	No 7	第16図	12	9	2	楕円	楕円	(鍋底状)	N-15°E		
226	N-30	No 8	第16図	20	20	6	ほぼ円	楕円	鍋底状	N-20°W		
227	N-31	No 1	第16図	16	15	2.5	ほぼ円	楕円	(鍋底状)	N-50°E		底穴2
228	N-31	No 2	第16図	20	17	5.5	ほぼ円	楕円	V字状	N-40°E		銀跡
229	N-31	No 3	第16図	20	11	4	楕円	楕円	鍋底状	N-55°W		

第VI章 遺物

本遺跡から得られた資料は、石器、軽石、土器、カムイヤキ窯須恵器、外国産陶磁器などであった（第2表）。

以下に種類ごとに紹介する。

1. 石器、軽石

石斧・剥片、軽石を第17図（図版9）に図示し第3表に計測一覧を記した。

2. 土器

口縁部等を第18図（図版10）に図示し第3表に計測一覧を記した。

3. カムイヤキ窯須恵器

胴部を第18図（図版10）に図示し第3表に計測一覧を記した。

4. 外国産陶磁器

白磁・青磁・青花・緑釉を第18図（図版10）に図示し第3表に計測一覧を記した。褐釉陶器を第19図（図版11）に図示し第4表に計測一覧を記した。

第2表 掲載遺物一覧

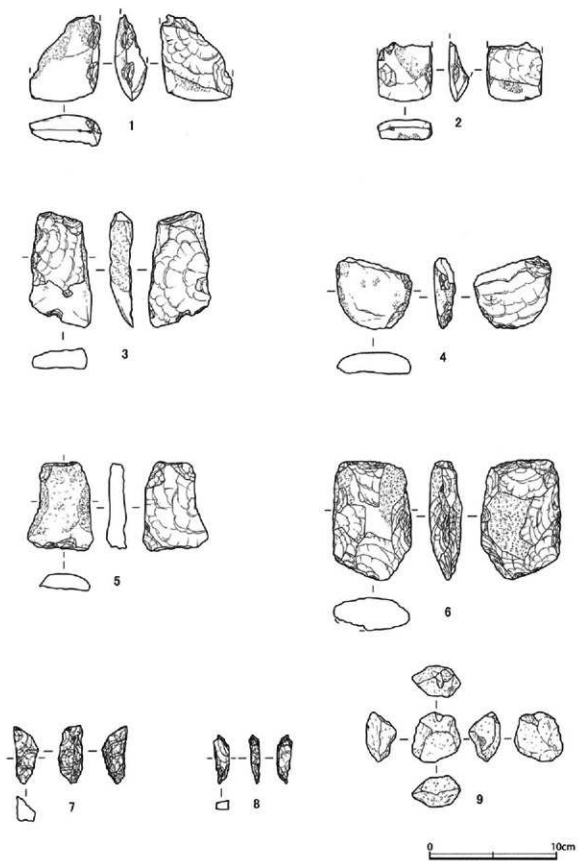
遺物の種 出土層序	石器	軽石	土器	カムイヤキ窯 須恵器	白磁	青磁	青花	緑釉	褐釉	合計
第Ⅱ層	2		1		1	6	5		1	16
第Ⅲ層	3		1	1						5
第Ⅳ層	2								1	3
第Ⅴ層	1		1							2
第Ⅸ層			1							1
包含層（一括）		1	1			2		1	2	7
表採							1			1
合計	8	1	5	1	1	8	6	1	4	35

第3表 石器、軽石計測一覧

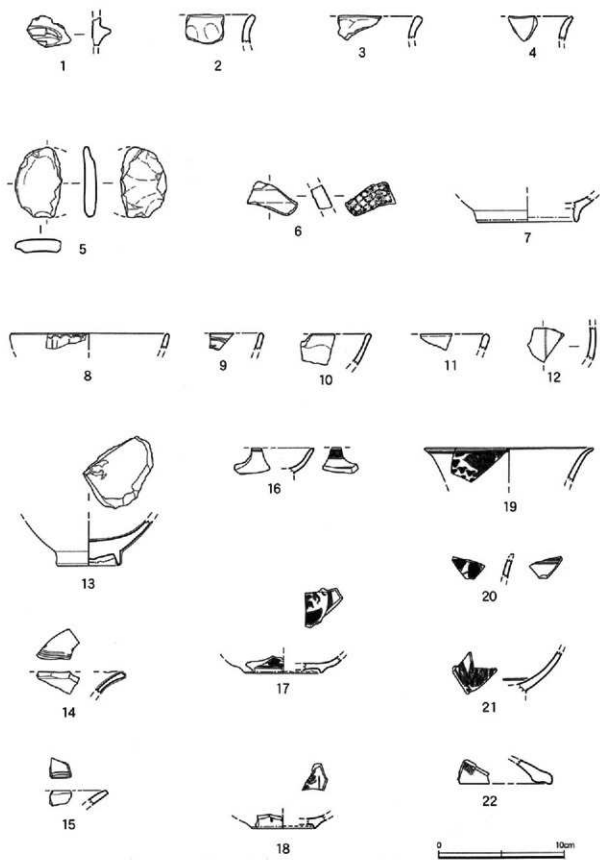
押収番号 図版番号	種類	出土地点	層序	法量 (cm・g)				破・完	石質
				長さ	幅	厚さ	重量		
第17図1 図版9の1	石斧	N-24	II層 0/20	6.8	5.6	2.5	81.8	破	変輝緑岩
第17図2 図版9の2	石斧	N-28	III層	4.65	4.3	1.6	39.5	破	緑色片岩
第17図3 図版9の3	石斧	O-22	8層 №1	9.05	4.9	1.8	111	破	変輝緑岩
第17図4 図版8の4	石斧	K-20	IV層 ドット①	5.65	6.0	1.7	76.2	破	千枚岩
第17図5 図版9の5	石斧	L-22	II層 №2	6.95	5.15	1.5	72.1	破	緑色片岩
第17図6 図版9の6	石斧	L-21	IV層 ドット№6	9.35	6.2	2.6	205.2	破	緑色片岩
第17図7 図版9の7	剥片	K-21	III層 ドット1	4.5	2.0	2.0	14.5	片	石英
第17図8 図版9の8	剥片	N-22	III層 40/60 トレンチ西側	3.8	2.0	2.0	14.5	片	石英
第17図9 図版9の9	不明	O-23	包含層 0/20	3.9	3.8	2.4	4.9	(片)	軽石

第4表 出土遺物観察一覧1

押収番号 図版番号	種類	機種	法量 (cm)	出土地点	備考・特徴
第18図1 図版10の1	土器	口縁部	—	O-22 埋部	色調：両面とも明赤褐色 取入物：白砂粒、褐色粒。
第18図2 図版10の2	土器	(口縁部)	—	M-23 次層西側アゼ	色調：両面とも明赤褐色。器面調整痕跡有り。 取入物：少量の褐色粒、白砂粒。
第18図3 図版10の3	土器	(口縁部)	—	M-21 II層 120/140	色調：赤褐色〜にぶい赤褐色。外面に調整痕有り。茶色粒、白色粒がわずかに混入。
第18図4 図版10の4	土器	(口縁部)	—	N-31 III層北側アゼ	色調：明赤褐色 茶色粒、白砂粒、黒色細片を混入。
第18図5 図版10の5	土器	不明	—	M-21 包含層 20/40	色調：明赤褐色。 白砂粒、黒色細片、透明細物片を混入。
第18図6 図版10の6	カミヤキタ 筑土器	胴部	—	L-23 III層 №1	内外面は灰色。芯部は暗褐色。白砂粒を多く含む。内面に格子状明き痕有り。
第18図7 図版10の7	白磁	碗(底部)	底径：8.0	L-24 II層 0/10	内外面とも淡黄の釉色。貫入・高台内外側を露筋。
第18図8 図版10の8	青磁	碗(口縁部)	口径：12.6	L-22 包含層 0/10	外面に継連文。直口縁。灰白色の粗い素地。内外面に淡黄緑色の失透釉。
第18図9 図版10の9	青磁	碗(口縁部)	—	L-23 II層 0/10	外面に書文(片切り形)。直口縁。灰白色の粗い素地。灰オリーブ色の釉を内外に施す。
第18図10 図版10の10	青磁	碗(口縁部)	—	M-27 II層 0/10	にぶい黄褐色の粗い素地。直口縁。両面とも黄褐色の薄い釉。
第18図11 図版10の11	青磁	碗(口縁部)	—	N-29 II層 0/10	素地は灰白色。直口縁。両面にオリーブ黄色の薄い釉。
第18図12 図版10の12	青磁	碗(胴部)	—	N-23 II層 0/20	外面に連文の一部。両面とも釉は劣化し、灰黄色。
第18図13 図版10の13	青磁	碗(底部)	底径：5.0	K-22 II層 №1	両面とも灰オリーブの釉色。貫入有り。外面は露筋。内底に印花文。
第18図14 図版10の14	青磁	皿(口縁部)	—	K-21 包含層 10/20	縁花部。両面に灰オリーブ色の釉。
第18図15 図版10の15	青磁	皿(口縁部)	—	M-25 II層 0/20	縁花部。両面に灰オリーブ色の薄い釉。やや劣化。
第18図16 図版10の16	青花	皿(口縁部)	—	L-25 南側アゼII層	口縁外面に黒線。内面に四方寿文(？)。見込みに黒線。灰白色の素地。
第18図17 図版10の17	青花	皿(底部)	底径：6.3	M-23 表深	外面、見込みに黒線と唐草文。灰白色の素地。
第18図18 図版10の18	青花	皿(底部)	底径：5.2	M-25 II層 0/20	素地は灰白色。呉須の発色は弱い。
第18図19 図版10の19	青花	碗(口縁部)	口径：14.0	L-24 II層 0/10	素地は灰白色。外面に豹皮状文(三葉状文様)と黒線。内面口縁に黒線。
第18図20 図版10の20	青花	碗(胴部)	—	M-25 II層 20/30	素地は灰白色。外面に草花文(唐草文)。内面に黒線・書文(四方寿文？)。呉須の発色はよい。
第18図21 図版10の21	青花	碗(胴部)	—	M-24 II層 0/20	素地は灰白色。外面腹面に芭蕉文。見込みに黒線。呉須は黒みがかかる。
第18図22 図版10の22	緑釉	壺(口縁部)	口径：6.6	L-21 包含層 0/20	素地はにぶい黄褐色。口縁外面に型整形による葉文。白化前後、緑釉を施す。



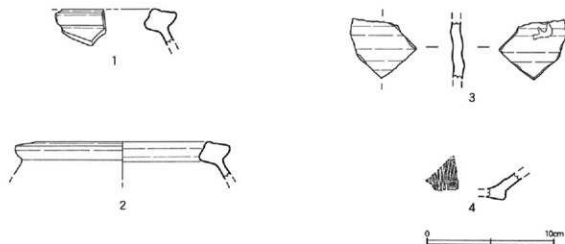
第17圖(圖版9) 石器：石斧(1~6)・剥片(7・8)、輕石：(9)



第18圖(圖版10) 出土遺物 1

第5表 出土遺物観察一覧2

挿図番号 図版番号	種類	機種	法量 (cm)	出土地点	備考・特徴
第19図1 図版11の1	褐輪陶器	壺 (口縁部)	—	M-24 IV層 西側アゼ	胎土は淡灰褐色。黒、褐色、白粒を含む。内外面とも暗オリーブの釉色。口縁は方形。口唇の平坦部分に沈線を描す。
第19図2 図版11の2	褐輪陶器	壺 (口縁部)	16.9	N-22 包含層 0/10	胎土は淡灰褐色。黒、褐色、白粒を含む。内外面ともオリーブ褐色の釉色。口縁は方形。口唇平坦部分に浅い沈線。
第19図3 図版11の3	褐輪陶器	壺 (胴部)	—	K-21 包含層 10/20	胎土は淡灰褐色。白、黒、褐色粒を含む。内外面とも茶褐色の釉色。明瞭なロクロ痕有り。
第19図4 図版11の4	褐輪陶器	鉢鉢 (底部)	—	M-28 II層 フットNo.1	胎土は明茶褐色。白、黒粒を含む。底部はくびれる。



第19図 (図版11) 出土遺物2

第七章 総括

前章までに「安謝東原北遺跡」の発掘調査の成果について、述べた。ここでは、今一度整理してまとめたい。

本遺跡の発掘調査の契機は、平成14年4月に実施された地域振興整備公団による那覇新都心土地区画整理事業に伴って発見されたことによる。

遺跡は、約1,400㎡の範囲で確認され、南東側から北西側に向かって緩やかに傾斜した地形に立地する。地形の傾斜に差異はあるものの、安謝東原遺跡・安謝東原南遺跡・銘苅港川原遺跡など、類似した地形に立地する遺跡は、那覇新都心地区内でも確認されている。集落遺跡と考えられるヒヤジョー毛遺跡・銘苅原遺跡を中心とした、同地区内の遺跡分布の在り方は今後の研究課題であろう。なお、本遺跡の範囲は、さらに西側に広がる状況にあった。

本遺跡の遺物包含層の堆積は10層に大別された。検出された遺構は、溝状遺構・水溜め状遺構・炭溜り遺構・土留め状遺構・ピットなどである。遺構は、遺跡の北西側（傾斜の深くなる方向）に集中する傾向が見られる。ピットは、鐵跡（工具痕）と見られるものも確認されている。炭溜り遺構と合わせて推察すると、生産遺跡（畑跡）の性格も示唆された。しかし、遺跡の立地を考え合わせた場合、なお、検討を要する。類似遺跡の集成及び比較検討が今後の課題として提示されよう。遺物は、土器・石器・カムイヤキ窯須恵器・白磁・青磁・青花などが出土した。出土遺物からの年代観は、概ね13世紀前後から16世紀前後が示唆された。

ちなみに、本遺跡より出土した炭化物について放射性炭素年代測定を行った（附編1）。分析資料は7点である。分析の結果、5点（第Ⅶ・Ⅹ層、炭溜り遺構）については、概ね1,200～1,500 B Pの年代値を示す（ $1,550 \pm 120$ ～ $1,120 \pm 90$ ）。これは、沖縄新石器時代後期に相当する年代観である。他1点（第Ⅱ層）は、 370 ± 40 B Pで16世紀前後の年代観であった。残る1点（第Ⅲ層）は、 90 ± 40 B Pで最も新しい年代値を示す。炭化材の材質は、そのほとんどが広葉樹に同定されている。

なお、「安謝前原北遺跡の自然科学分析」の結果も附編2に掲載したので参照頂きたい。

那覇新都心地区内では、沖縄新石器時代前期・同後期・グスク時代及び近世の遺跡が21遺跡確認されている。今後、同地区内における遺跡の立地について再整理・検討を加えることが必要と考える。

【参考文献】

- 『安謝東原遺跡』 那覇市教育委員会 1995年8月
『安謝東原南遺跡 旧天久村古井戸遺跡』 那覇市教育委員会 2000年3月
『ヒヤジョー毛遺跡』 那覇市教育委員会 1994年3月
『銘苅原遺跡』 那覇市教育委員会 1997年3月

附 編 1

安謝東原北遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告は、安謝東原北遺跡（沖縄県那覇市大字安謝）の発掘調査において認められた炭化物を対象として行った放射性炭素年代測定の結果報告である。

1. 試料

試料は、炭化物、炭化物混じり土壌の9点からなる。土層や遺構（炭溜り）、試料の状況を考慮し、調査担当者と協議を行い、これらの試料のうち7点を対象に放射性炭素年代測定を実施することとした。また、分析対象試料とした炭化物は、その由来や樹種等の情報を得るため、炭化材同定を合せて行っている。試料の詳細及び分析手法、結果を表1に示す。

2. 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、対象試料が1.0g以下の微量の炭化物3点（K-22グリッドⅢ層、M-25グリッドⅡ層、O-22グリッドⅧ層）については加速器質量分析（AMS）法、その他の4試料についてはβ線計数法を用いている。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用し、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。測定年代の補正に用いた $\delta^{13}C$ の値は、加速器を用いて試料炭素の $^{13}C/^{14}C$ を測定し、標準試料PDB（白亜紀のペレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰パーミル）で表したものである。また、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。また、炭化物の同定は、実体鏡による木材組織観察を行っている。

3. 結果

結果を表1・2に示す。試料の測定年代（補正年代）は、O-22グリッドⅧ層は $1200 \pm 40BP$ 、M-25グリッドⅡ層は $370 \pm 40BP$ 、K-22グリッドⅢ層は $90 \pm 40BP$ 、M-21グリッド炭溜りは $1120 \pm 90BP$ 、O-22グリッドX層は $1290 \pm 80BP$ 、N-21グリッド炭溜りは $1550 \pm 120BP$ 、M-31グリッド炭溜りは $1460 \pm 70BP$ を示した。また、これらの年代を示した試料は、分析試料の抽出が不可能であったO-22グリッドⅧ層を除き、いずれも広葉樹に同定された。

表1. 放射性炭素年代測定結果

グリッド	層名・地点名	試料の質	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
O-22	Ⅷ層	木炭	—	1200 ± 40	-28.07 ± 0.59	1220 ± 30	IAAA-32031
M-25	Ⅱ層	木炭	広葉樹	370 ± 40	-25.61 ± 0.96	390 ± 30	IAAA-32032
K-22	Ⅲ層	木炭	広葉樹	90 ± 40	-26.81 ± 0.75	120 ± 30	IAAA-32033
M-21	炭溜り	木炭	広葉樹	1120 ± 90	-23.5	—	IAA-485
O-22	X層	木炭	広葉樹	1290 ± 80	-27.5	—	IAA-486
N-21	炭溜り	木炭	広葉樹	1550 ± 120	-26.9	—	IAA-487
M-31	炭溜り	木炭	広葉樹	1460 ± 70	-27.4	—	IAA-488

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年値であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

グリッド	層名・地点名	試料の質	樹種	暦正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
O-22	燐層	木炭	—	1200 ± 40	cal AD 780 - cal AD 833	cal BP 1,170 - 1,117	0.554	IAAA-32031		
					cal AD 836 - cal AD 878	cal BP 1,114 - 1,072	0.446			
M-25	II層	木炭	広葉樹	370 ± 40	cal AD 1,467 - cal AD 1,521	cal BP 483 - 429	0.558	IAAA-32032		
					cal AD 1,580 - cal AD 1,626	cal BP 370 - 324	0.442			
K-22	III層	木炭	広葉樹	90 ± 40	cal AD 1,694 - cal AD 1,726	cal BP 256 - 224	0.272	IAAA-32033		
					cal AD 1,813 - cal AD 1,848	cal BP 137 - 102	0.290			
					cal AD 1,869 - cal AD 1,918	cal BP 81 - 32	0.417			
					cal AD 1,949 - cal AD 1,951	cal BP 1 - -1	0.021			
M-21	炭溜り	木炭	広葉樹	1120 ± 90	cal AD 782 - cal AD 791	cal BP 1,168 - 1,159	0.046	IAA-485		
					cal AD 810 - cal AD 844	cal BP 1,140 - 1,106	0.151			
					cal AD 854 - cal AD 999	cal BP 1,096 - 951	0.803			
O-22	X層	木炭	広葉樹	1290 ± 80	cal AD 657 - cal AD 782	cal BP 1,293 - 1,168	0.925	IAA-486		
					cal AD 791 - cal AD 808	cal BP 1,159 - 1,142	0.075			
N-21	炭溜り	木炭	広葉樹	1550 ± 120	cal AD 400 - cal AD 623	cal BP 1,550 - 1,327	0.971	IAA-487		
					cal AD 628 - cal AD 638	cal BP 1,322 - 1,312	0.029			
M-31	炭溜り	木炭	広葉樹	1460 ± 70	cal AD 539 - cal AD 655	cal BP 1,411 - 1,295	1.000	IAA-488		

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
付いた誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4.考察

本分析の結果、O-22グリッドV層、M-21グリッド炭溜り、O-22グリッドX層、N-21グリッド炭溜り、M-31グリッド炭溜りの5試料は約1200～1500BPの年代値を示した。これに対し、M-25グリッドII層(370±40)やK-22グリッドIII層(90±40)の2試料は極めて新しい年代値を示した。なお、O-22グリッドV・X層で得られた年代値は土層の新旧関係は調和的であるが、上位のK-22グリッドIII層とM-25グリッドII層では、II層よりも下位の土層と考えられるIII層で最も新しい年代が得られており、分析試料となった炭化物の由来や出土状況や土層の堆積状況について検討する必要がある。

隣接する安謝東原遺跡南地区では、炉跡内覆土(I層)及び炉跡内炉床(II層下部)基本土層6層から出土した炭化物を対象として放射性炭素年代測定が実施され、順に610±50BP、730±60BP、1270±60BPという年代値が得られている(那覇市教育委員会,1995)。この結果を参考とすると、1)本遺跡で検出された炭溜り遺構と年代観が異なる、2)安謝東原遺跡南地区基本土層6層は琉球石灰岩直上に堆積した土層と、本遺跡で得られたVIII・X層に近い年代を示す、3)2)で得られた年代よりも古い年代値を示す遺構(N-21グリッド炭溜り・M-31グリッド炭溜り)が存在する、といった点が指摘される。このことから、本遺跡及び周辺では、貝塚時代後期には生業活動が開始され、これ以降の生業活動の痕跡が残されたと推測される。

現段階では、本遺跡の基本土層や考古学的な所見がないため詳細な検討は控えるが、今後、本分析結果や安謝東原遺跡の成果を検証するため、本遺跡の立地や土層の堆積状況など発掘調査時の所見を含め、改めて検討することが望まれる。

引用文献

那覇市教育委員会,1995.那覇市文化財調査報告書第29集 安謝東原遺跡—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ—。那覇市教育委員会,52p.

附 編 2

安謝前原北遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告は、安謝前原北遺跡（沖縄県那覇市大字安謝）の発掘調査において出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果報告である。

1. 試料

試料は、か-14グリッド焼土面Ⅱ、お-10グリッド土坑28、か-13グリッド土坑13から出土した炭化物3点である。これら試料について、放射性炭素年代測定と、炭化物の由来や樹種等の情報を得るため炭化材同定を行う。

2. 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、炭化物量が少ないと判断された試料（お-10グリッド土坑28）1点は加速器質量分析（AMS）法、この他の2試料についてはβ線計数法を用いる。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。測定年代の補正に用いた δ 13Cの値は、加速器を用いて試料炭素の13C濃度（13C/14C）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のペレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰：パーミル）で表したものである。また、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算を行っている。なお、炭化物については、実体鏡による木材組織観察により樹種の同定を行う。

3. 結果

結果を表1・2に示す。試料の測定年代（補正年代）は、か-14グリッド焼土面ⅡのスミⅢは1430±90BP、お-10グリッド土坑28は1160±40BP、か-13グリッド土坑13は1470±90BPの値を示した。また、分析対象とした試料は、いずれも広葉樹に同定された。

表1. 放射性炭素年代測定結果

グリッド	遺構・地点名	試料の質	樹種	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code No.
か-14	焼土面Ⅱ スミⅢ	木炭	広葉樹	1430 ± 90	-26.7	—	IAA-483
お-10	土坑 28	木炭	広葉樹	1160 ± 40	-31.61 ± 0.66	1270 ± 30	IAAA-32030
か-13	土坑 13	木炭	広葉樹	1470 ± 90	-26.5	—	IAA-484

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

グリッド	遺構・地点名	試料の質	樹種	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
か-14	焼土層Ⅱ	スミシ	木炭	広葉樹	1430 ± 90	cal AD 533 - cal AD 687	cal BP 1,417 - 1,263	1.000	IAA-483
お-10	土坑 28		木炭	広葉樹	1160 ± 40	cal AD 782 - cal AD 790	cal BP 1,168 - 1,160	0.074	IAAA-32030
						cal AD 813 - cal AD 843	cal BP 1,137 - 1,107	0.237	
						cal AD 857 - cal AD 898	cal BP 1,093 - 1,052	0.387	
						cal AD 921 - cal AD 956	cal BP 1,029 - 994	0.302	
か-13	土坑 13		木炭	広葉樹	1470 ± 90	cal AD 441 - cal AD 449	cal BP 1,509 - 1,501	0.036	IAA-484
						cal AD 467 - cal AD 483	cal BP 1,483 - 1,467	0.077	
						cal AD 491 - cal AD 498	cal BP 1,459 - 1,452	0.035	
						cal AD 511 - cal AD 516	cal BP 1,439 - 1,434	0.022	
						cal AD 529 - cal AD 657	cal BP 1,421 - 1,293	0.831	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and P J Reimer) を使用
付記した誤差は、測定誤差σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4. 考察

本分析で対象試料とした炭化物はいずれも炭化材であり、細片のため種類の特定までは至らなかったが、少なくとも複数種の広葉樹の樹種からなることが確認された。

また、近隣の安謝東原遺跡 (那覇市教育委員会, 1995)・安謝東原北遺跡では、検出された遺構 (炉跡・炭溜り) や基本土層中から出土した炭化物を対象に放射性炭素年代測定が実施されている。その結果、貝塚時代後期及びそれ以降の年代値が得られており、本分析結果と比較すると、か-14焼土面Ⅱやか-13土坑13は、安謝東原北遺跡のN-21炭溜り (1550 ± 120 : IAA-487)、M-31炭溜り (1460 ± 70 : IAA-488) と概ね近い年代値を示し、お-10土坑28は、安謝東原遺跡の基本土層6層や安謝東原北遺跡のⅧ・Ⅹ層、M-21炭溜りに近い年代値を示す。このことから、これらの遺跡では、貝塚時代後期において年代値が2時期に集中する傾向を指摘することができる。

これらの傾向を示す要因は現段階では不明であるが、各遺跡の立地や土層堆積状況等の遺跡の形成に関わる所見や、分析試料とした炭化材の履歴、発掘調査成果等の考古学的成果と合せ検討することにより明らかになると期待される。

引用文献

那覇市教育委員会, 1995, 那覇市文化財調査報告書第29集 安謝東原遺跡—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ—那覇市教育委員会, 52p.

圖 版



図版 1 那覇新都心と遺跡の位置 (2003年2月撮影1 : 10,000)

(上が北)



表土剥ぎ作業の開始（北西から）



発掘調査の状況（北西から）



完掘調査の状況（東から）

図版 2 安謝東原北遺跡：遺跡の全景



グリッド設定作業（南西から）



掘下げ作業の開始（北西から）



遺構確認作業の状況（南から）

図版3 安謝東原北遺跡：発掘調査の状況



土層観察アゼの設定状況



M・N-20・21西壁

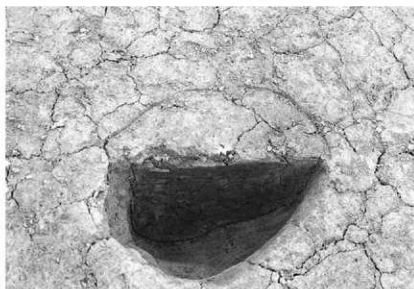


M-22西側アゼ

図版 4 安謝東原北遺跡：遺跡の層序



銀跡の断面状況
(M-21グリッドNo.3)



Pitの断面状況
(J-20グリッドNo.3)



炭溜り遺構の断面状況
(N-21グリッド)

図版 5 安謝東原北遺跡：検出された遺構の状況①



雨天後の水溜遺構と溝状遺構



雨天後の水溜遺構と溝状遺構



土溜め状遺構

図版6 安謝東原北遺跡：検出された遺構の状況②



遺物の出土状況
(M-24グリッド)



獣骨(歯)の出土状況
(M-23グリッドNo.9)



石器の出土状況
(M-23グリッドNo.2)

図版 7 安謝東原北遺跡：出土遺物の状況



平板実測作業の状況

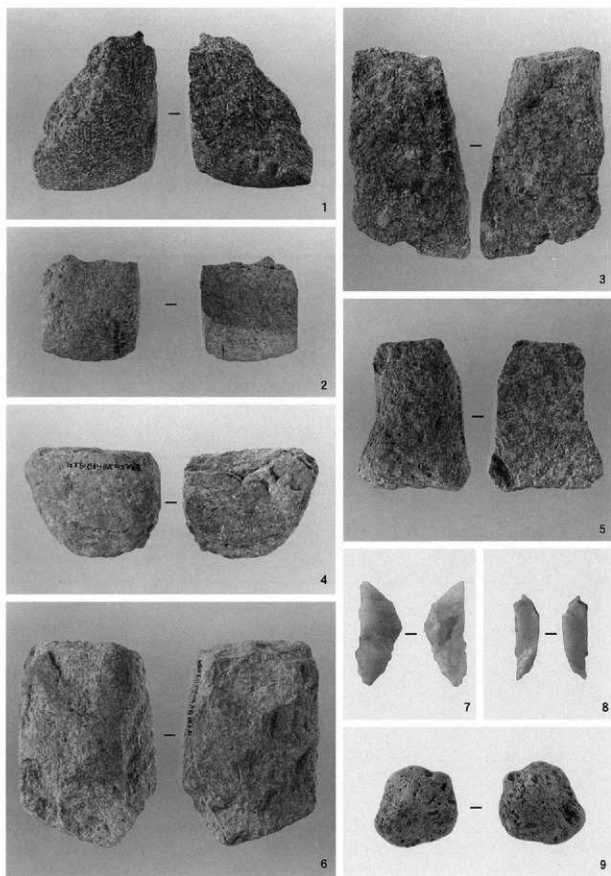


遺構実測作業の状況

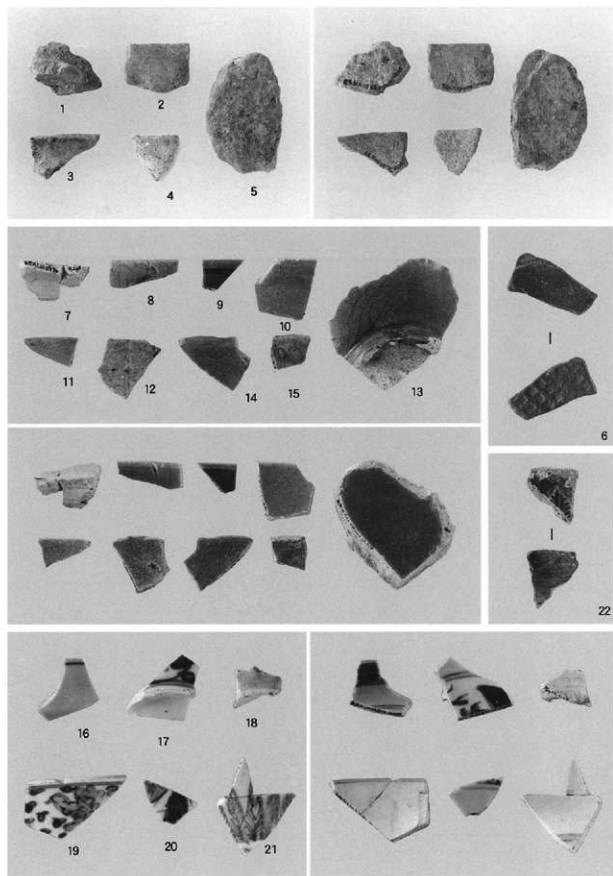


掘下げ作業の状況

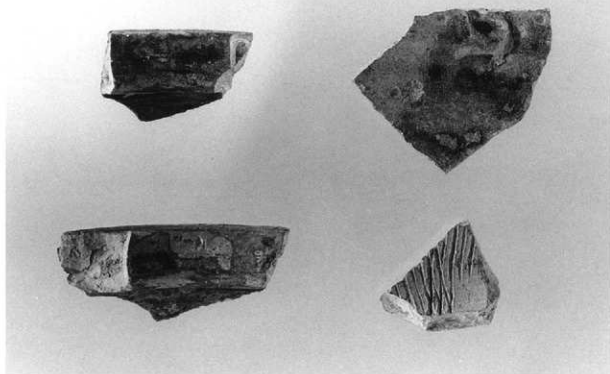
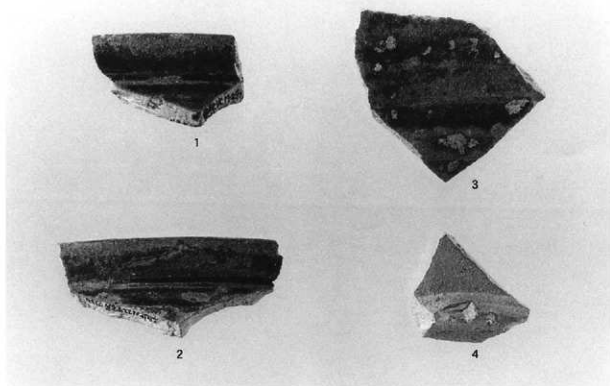
図版 8 安謝東原北遺跡：作業の状況



図版9 (第17圖) 石器：石斧 (1~6)・剥片 (7・8)、槌石：(9)



圖版10 (第18圖) 出土遺物1



圖版11 (第19圖) 出土遺物2

銘苧古墓群北 C 地区

銘苅古墓群北C地区発掘調査報告書

第I章 調査に至る経緯

本遺跡の所在する一帯は、第二次大戦後の1953（昭和28）年米軍によって接収され、1987（昭和62）年に全域が返還された地域である。その後同地域は、一般に「天久解放地」と称され、現在では那覇新都心として新しい街造りが地域振興整備公団（以下、公団）によって進められている。その面積は約214ヘクタール（約60万坪）もの広大な土地である。

さて、同地区には九遺跡の所在が確認されていた（2004年3月現在「那覇新都心」地区内には21遺跡が所在している）。

九遺跡の発掘調査は、土地区画整理事業を進める公団から委託を受けた那覇市教育委員会（以下、市教委）により平成2年7月から開始された。

本遺跡は、平成14年4月、公団による造成作業中にその存在が確認されたものである。当初は、3基の古墓が確認されていた。発見された古墓の位置から銘苅古墓群北地区の中の「C地区（第1号墓～8号墓）」に該当する墓群であることが確認された。その中で7基についてはすでに発掘調査が完了（平成5・6・9年度発掘調査第1～4、6～15号墓）しており、1基は墓室内が未調査（第5号墓）、残る1基は未調査の遺構である（第16号墓とした）ことが判明した。

土地区画整理事業地内に展開する未調査の2基の古墓の取り扱いについては、公団と市教委との間で調整・協議が行われ、記録保存の為に緊急発掘調査が必要であるとの結論に達し、平成14年12月から発掘調査が実施された。

【参考文献】

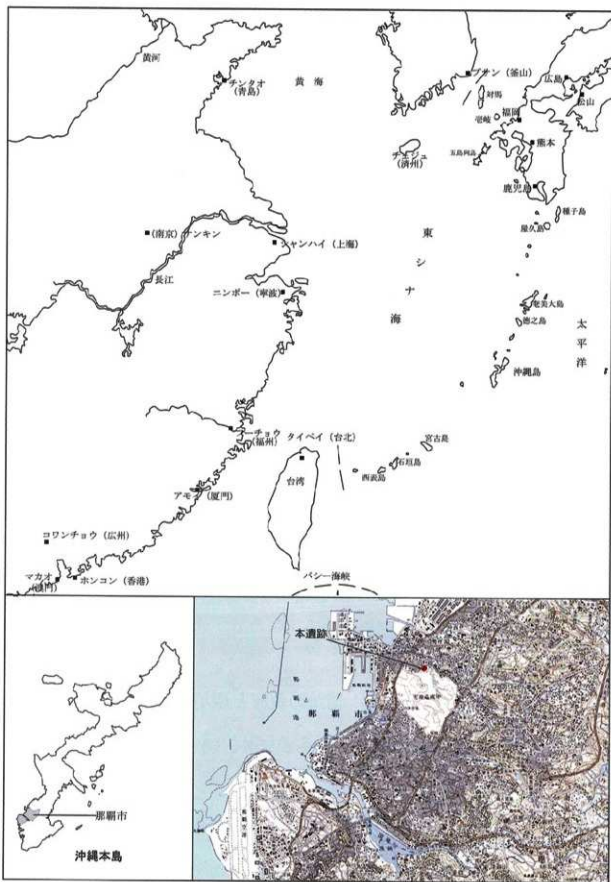
- 『那覇市史 資料篇第3巻4 戦後新聞集成2』 那覇市企画部市史編集室 1983年3月
『写真でつづる 那覇 戦後50年前後 1945-1995』 那覇市文化局歴史資料室 1996年3月
『那覇新都心』 地域振興整備公団
『銘苅古墓群（Ⅲ）』 那覇市教育委員会 2001年3月

第II章 遺跡の位置と環境

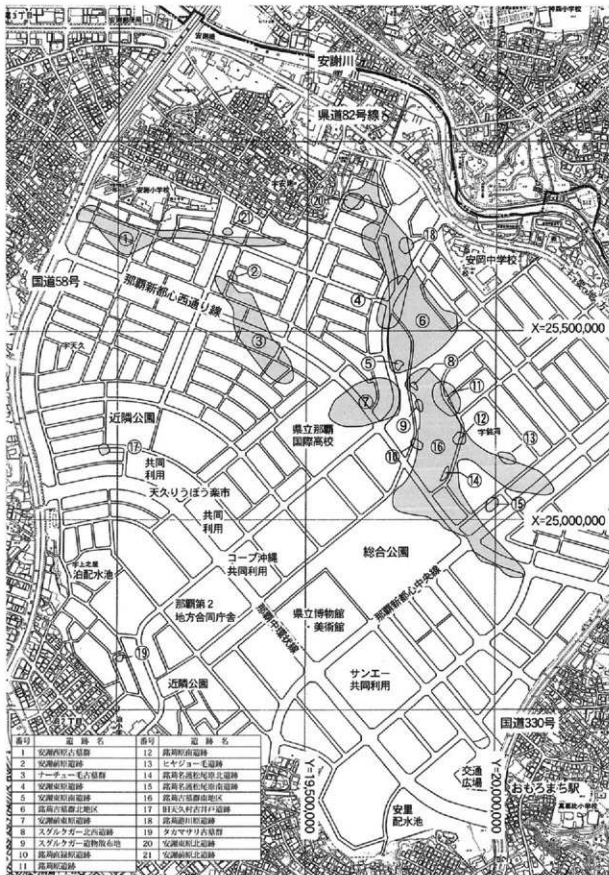
本遺跡の所在する沖縄県那覇市は沖縄本島の南西部に位置し（第1図）、面積38.99平方km、総人口307,128人（2004年9月現在）を擁する県庁所在都市である。本市は東中国海に西面し、東側に弁ヶ嶽・首里城付近を頂点とする台地があり、南側には小塚台地がある。また、北側は天久台地がある。現在、那覇市においては本市西側の県庁周辺地域に企業や官公庁が集中しているが、本市北西側にあった米軍基地が返還されたことに伴い、その跡地が「那覇新都心」として開発され脚光を浴びている。

銘苅古墓群北地区は、この「新都心」の中にある（第2・3図）。

ここは台地に囲まれた、やや開けた地である。新都心の中を、南から北に向けて銘苅川と大湾川が

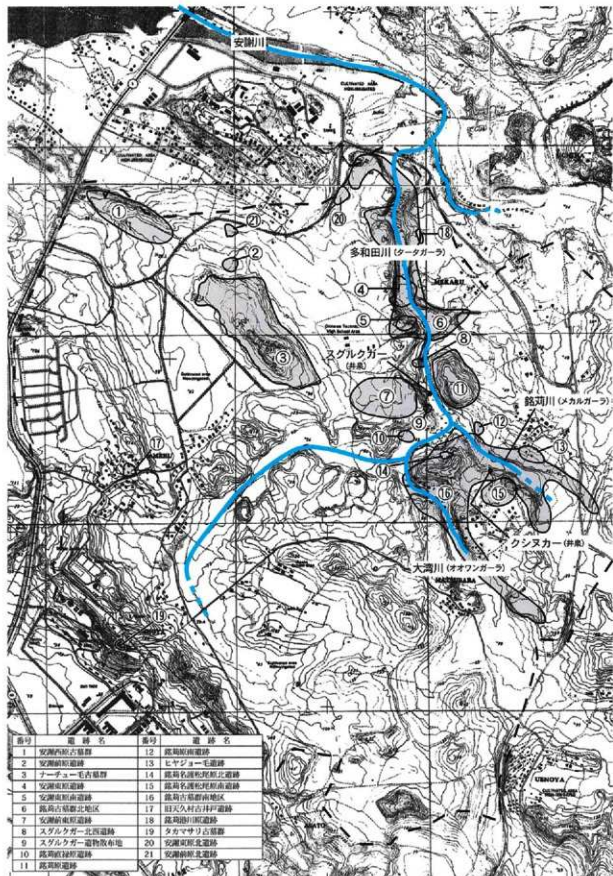


第1図 那覇市の位置と遺跡の位置



第3図 那覇新都心地区内の道跡概略分布

S=1:10,000



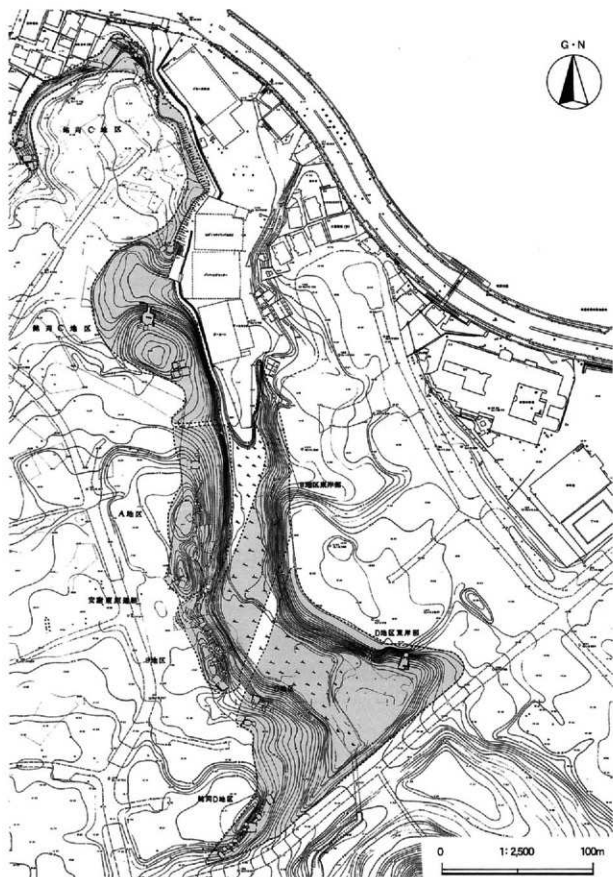
第4図 那覇新都心地区内の地形と遺跡の概略分布

S 1 : 10,000



第5図 旧真和志の歴史・民俗地図

S 1 : 10,000



第6图 铭苻古墓群北地区

流れている（第4図）。これらの河川の両岸には琉球石灰岩を基盤とする台地があり、その崖沿いに銘苅古墓群南地区がある。両河川は新都心の中にあるスグルクガー付近で合流し、多和田川と名を変えて、安謝川へと連なり海へと注がれる。この多和田川沿いの両岸にあるのが、銘苅古墓群北地区である。この地区はA～E地区に細分される（第6図）。

今回報告する銘苅古墓群北C地区は、那覇市大字銘苅小字港川原に所在する。琉球石灰岩を掘り込んで構築された墓群である。往時は周辺にも多くの墓が在り、緑豊かで閑静な場所であったと想像される。

文献や口碑などから復元された15世紀初め頃的那覇地図や昭和初期を想定した民俗地図等によればこの付近まで入り江があったようであり、このことから「港川原」の地名が付いたことが容易に推測される（第5図）。

現在は次々と建物が建築され、新興住宅地となっており、埋め立てによって海岸線も遠のき、往時の面影は失われている。

新都心の中には、本古墓群以外にもいくつかの古墓群が所在する（第2図）。「安謝西原古墓群」・「ナチャー毛古墓群」などがそれである。これらは河川沿いにある銘苅古墓群とは立地条件が若干異なるもののいずれも琉球石灰岩を基盤とした丘陵斜面にある。その斜面を掘り込んで造られた、近世を主要な年代とする古墓群である。

【参考文献】

1985 目崎茂和 「第一編 第一章 第二節 古地理」『那覇市史 通史篇 第一巻』

那覇市企画部文化振興課

第三章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

本遺跡は、平成14年度（2001年4月）、公団による造成工事中に発見されたものである。その後、公団との調整を経て平成14（2002）年12月から市教委によって本発掘調査が開始された。

以下、調査経過の概略を示す。

第一次調査

2002（平成14）年

12月9日 本日より発掘調査を開始する。

第5～7号墓底の埋土の除去作業から始める。作業開始状況の写真撮影も行う。

10日 第5・6号墓底の右垣の精査を行う。第16号墓底の右下隅から骸骨器2基を確認。

11日 第5・6号墓底の入り口部の状況が概ね確認できる。第16号墓サンミデー部から銭貨（寛永通宝）1枚を確認。

12日 雨天のため室内作業を行う。

- 13日 第5・6号墓上の周辺について精査作業を行う。
- 16日 第16号墓底の埋土の除去作業を行う。
- 17日 第5号墓底周辺の埋土除去、清掃作業が概ね完了。遺構確認状況の写真撮影を開始。
第16号墓底及びその周辺について掘下げ作業及び清掃作業を重点的に行う。
- 19日 第16号墓底清掃作業を行う。雨天のため午前10時以降、室内作業を余儀なくされる。
- 24日 第16号墓底の入り口部の埋土除去作業が概ね完了し、清掃作業に入る。
その後、隣接して所在する「安謝東原北遺跡」の調査を優先させるため本古墓群の調査を一次中断することとする。
- 27日 本年の発掘調査を終了

2003（平成15）年

- 1月28日 第5号墓の調査を再開。墓底の半截作業から開始する。
- 30日 第5号墓清掃作業を行って、写真撮影を実施。
- 31日 第5号墓、墓底半截作業を完了。写真撮影を実施。
「安謝東原北遺跡」の調査を優先させるため本古墓群の調査を一次中断することとする。

第二次調査

2003（平成15）年

- 5月21日 第16号墓、墓室内蔵骨器安置状況の写真撮影を行う。
- 26日 第16号墓室、調査開始前の安全祈願を行う。
- 6月11日 第16号墓室、作業前の状況写真を撮影。
- 7月14日 第16号墓平板実測作業を開始する。
- 16日 第5号墓平面実測作業。第16号墓室蔵骨器安置状況確認。
- 17日 第5号墓平面（墓室）実測作業。
第16号墓の平面実測はほぼ終了。墓底埋土及び清掃作業を開始。
- 18日 第5号墓平面（墓室）実測をほぼ終了。
- 22日 第5号墓室断面実測作業を行う。
第16号墓室の作業状況について写真撮影を行う。
- 23日 第5号墓断面実測、ほぼ終了。
第16号墓底、横断トレンチ掘下げ作業を実施。
- 28日 第16号墓室作業状況写真撮影。蔵骨器取り上げ。墓底は完掘する。
- 29日 第16号墓、座標測量作業。
- 30日 第16号墓、墓室精査作業。立面実測の為の割り付け作業を行う。
- 7月31日 銘苅古墓群北C地区第16号墓清掃作業。墓室内の完掘状況の写真撮影。
調査区一帯の片づけを行って、現地調査を終了する。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

調査責任者 那覇市教育委員会 教育長 仲田美加子（平成14・15年度）

調査責任者及び調査総括 文化財課 課 長 金武 正紀（平成14年度）
 " " 古塚 達朗（平成15年度）

調査事務 那覇市教育委員会 " 主 幹 喜納 曙（平成15年度）
 " " " 係 長 "（平成14年度）
 " " " 主任 主事 上原 善英（平成14・15年度）

調査担当 那覇市教育委員会 文化財課 主任専門員 島 弘
 " " " 専 門 員 玉城 安明
 " " " " 仲宗根 啓
 " " " " 樋口 麻子
 " " " " 當銘 由嗣
 " " " 調査補助員 譜久里昌代（平成14年度）
 " " " " 山川由美子（ " ）
 " " " " 栗山 初美（ " ）
 " " " " 比嘉 君子（ " ）
 " " " " 杉村千重美（ " ）

第一次発掘調査作業員（平成14年度）

井上雅江 上江洲由昇 大城輝子 大嶺愛子 喜瀬彰 儀間哲治 國仲哲夫 崎山乗一郎
 島靖雄 棚原三明 中松雪乃 永吉弘子 西島本成子 比嘉武 比嘉千賀子 古堅かつえ
 前田孜 安田敏夫 湧川啓子

第一次発掘調査世話人（平成14年度）

大城ますみ

第二次発掘調査作業員（平成15年度）

上江洲由昇 大城輝子 大嶺愛子 儀間哲治 崎山乗一郎 玉城利江子 玉城乾一朗
 知念キヨ子 桃原佐恵美 中松雪乃 永吉弘子 比嘉武 比嘉千賀子 樋口光子
 古堅かつえ 前田孜 安田敏夫 湧川啓子

第二次発掘調査世話人（平成15年度）

大城ますみ

第IV章 遺構

今回は、2基の古墓が調査の対象であった（第7図）。以下、それぞれの特徴を示す。

1. 第5号墓（第8図）

琉球石灰岩の基盤を掘り込んで墓室を構築する。墓室の平面形は、直径220cm、短径200cmを測る楕円形を呈する。なお、墓室内には、コの字状に1段のタナを設けられる。墓口は、琉球石灰岩の切石を用いる。墓底は、銘苅古墓群北C地区第6号墓と共有する。墓道は、幅約60cm、長さ120cmを測る。出土遺物としては、墓底の埋土から、蔵骨器片、本土産磁器、沖縄産陶器などが得られている。

2. 第16号墓（第9図）

琉球石灰岩の基盤を掘り込んで墓室を構築する。墓口正面、墓室のタナには、琉球石灰岩の切石を用いる。墓室は、奥行き265cm、幅275cm、高さ144cmを測る。また、コの字状にタナが設けられ奥タナは2段となる。墓室内と墓底から蔵骨器が確認できた。

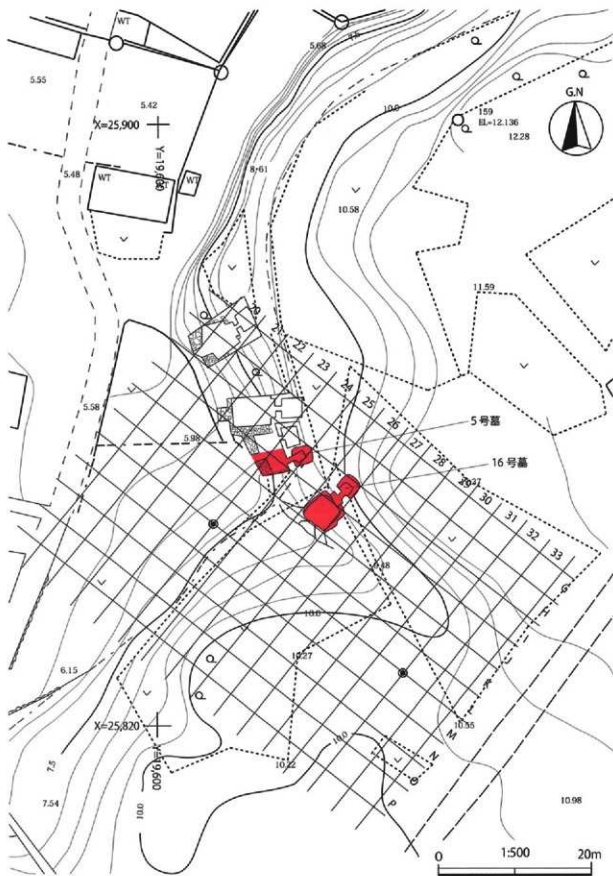
第V章 遺物

今回の調査で得られた資料は、総数306点である（第1表）。種類は、蔵骨器28点、本土産陶磁器5点、沖縄産施釉陶器28点、沖縄産無釉陶器105点、陶質土器11点、瓦質陶器2点、瓦1点、土器1点、円盤状製品2点、銭貨1、その他122点である。ここでは、第16号墓出土資料を紹介する。

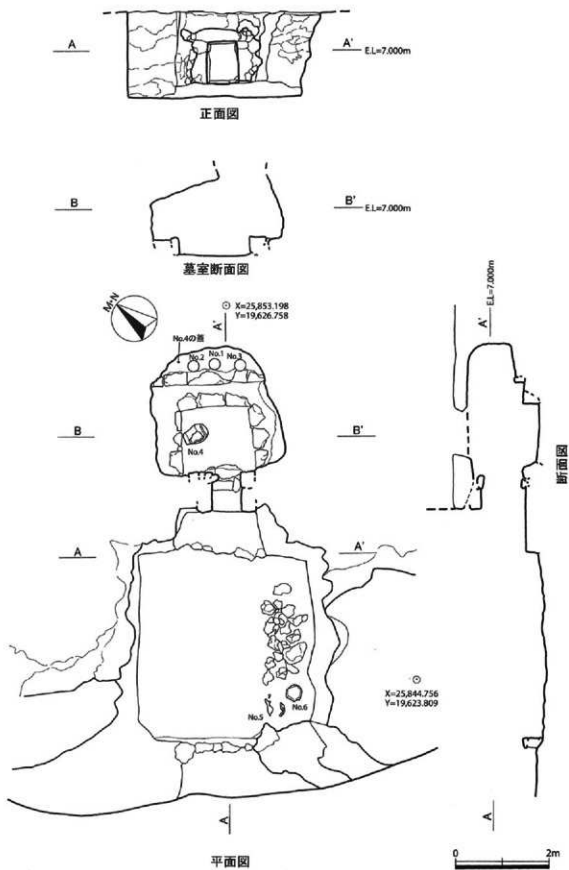
第1表 遺物出土一覧

出土位置	遺物の種類	蔵骨器	本土産陶磁器	施釉陶器	無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	瓦	土器	円盤状製品	銭貨	その他	合計
第5号墓埋土				1									1
第5号墓底フク土												16	16
第5号墓底清掃				2									2
第5号墓上				2	2							6	10
第5・6号墓墓底埋土	15		3	5	8	5						6	42
第5・6号墓表探				1									1
第16号墓室内	8												8
第16号墓室埋土					41								41
第16号墓サンミデー											1		1
第16号墓5・6号カメ					7							1	8
第16号墓底右下隅					1	1						2	4
第16号墓底左隅										1		27	28
第16号墓底フク土	1		10		36	4	2	1	1	1		3	59
第16号墓埋土	2		2	6	9	1						61	81
第16号墓底		2											2
第16号墓上清掃					1								1
第16号墓表探				1									1
合計		28	5	28	105	11	2	1	1	2	1	122	306

※その他には、鉄片・釘・獣骨・貝殻遺骸・炭化物・木片・焼土が含まれる



第7图 铭荊古墓群北C地区 第5号墓·第16号墓



第9图 第16号墓尖测图

1. 蔵骨器

今回得られた資料は蓋6点、身6点の計12点である。全て第16号墓からの出土であり、身と蓋のセット関係が明らかであった。

蔵骨器観察表の形式分類と銘書の凡例は、『銘苧古墓群Ⅲ』の「第Ⅴ章 第1節 蔵骨器」に準拠した。出土した蔵骨器はⅢ・Ⅴ・Ⅵ類に属するものであり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類は出土していない。また、転用蔵骨器も出土していない。以下に各分類ごとの概要を記す。

Ⅲ 陶製無形甕形蔵骨器

第10図1・2と図版18のA・Bである。正面に孔を穿った窓がある。2の庇は5mm、Bは4mm張り出しており、直線的な形状である。また、いずれにも正面左側部に窯印とみられる記号がある。

1の蓋は、つまみのないタイプである。Aはつまみが破損しているが、形状より考えて饅頭形(Ⅲb)に属すると考える。また、内面に銘書が認められるが、「乾隆」の文字は線で見え消しされている。

Ⅴ 陶製有形甕形蔵骨器

第10図3・5・6と図版19のCである。Cと3は外面にのみマンガン釉が施釉されているが、5・6の外面は釉薬を施釉しており、黄みがかった色調を呈している。内面にはマンガン釉を施釉している。3はⅤ類の典型的な形である。6は窓の両脇に線彫りによる蓮花が施されているなど、Ⅲ類の特徴も兼ね備えている。なお、6の銘書きには「甲亥」が読み取れるが、そのような十干十二支は無い。従って、「乙亥」の誤りではないかと考えられ、洗骨年は1755(乾隆20)年もしくは1815(嘉慶20)年と思われる。

蓋はCが4mm、5が1.6mmの「き」をそれぞれ有している。

Ⅵ 陶製軒付甕形蔵骨器

第10図4と図版19のD～Fである。身部に貼付による装飾が施されている。いずれも降棟に獅子等の装飾は認められない。

(注)

1. 2000 金武正紀「第Ⅴ章 第1節 蔵骨器」『銘苧古墓群(Ⅲ)』那覇市文化財調査報告書第50集 那覇市教育委員会

第2表 蔵骨器分類表

名称又は仮称	身	蓋
I 石製家形	方形で4脚付	入母屋
II 陶製家形	〃	a. 切妻 b. 入母屋(御殿形) c. 寄棟(民家形)
III 陶製無頸壺形 (ポージャー)	1. 中型(高さ50cm前後) 2. 大型(高さ60cm前後) 3. 小型(高さ40cm前後)	a. 宝珠形つまみ b. 饅頭形つまみ c. つまみなし
IV 陶製円筒形	1. 円筒形で3脚付 2. 円筒形で高台付	a. 円形屋根形で宝珠形つまみ b. ポージャータイプで宝珠形つまみ
V 陶製有頸壺形	1. 文様なし(ポージャーに近い) 2. 貼付文(〃) 3. 貼付文 4. 貼付文+線形文 5. 線形文	a. 約5mm以上の「き」 b. 約5mm以下の「き」 c. 「き」なし
VI 陶製軒付壺形	1. 降棟に獅子等の装飾があるもの 2. 降棟(くんだりむね)に装飾のないもの	a. 降棟に獅子等の装飾があるもの b. 降棟に装飾のないもの

※ミガチ(銘書)の凡例

□□→不鮮明な文字。

・・→文字があったと考えられるがその部分が欠損している。

()→その部分の文字はないが、全体からみてそうように考えられる。

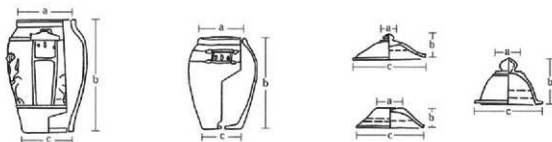
氏、家名、名乗頭の項目も同じ。

/ →文章の切れ目。

< > →ミガチ(銘書)に()書きされている。

[右][左][内面][ふち]→ミガチ(銘書)の書かれている場所。

※凡例については下記のとおりである。(a:上部径 b:器高 c:下部径)



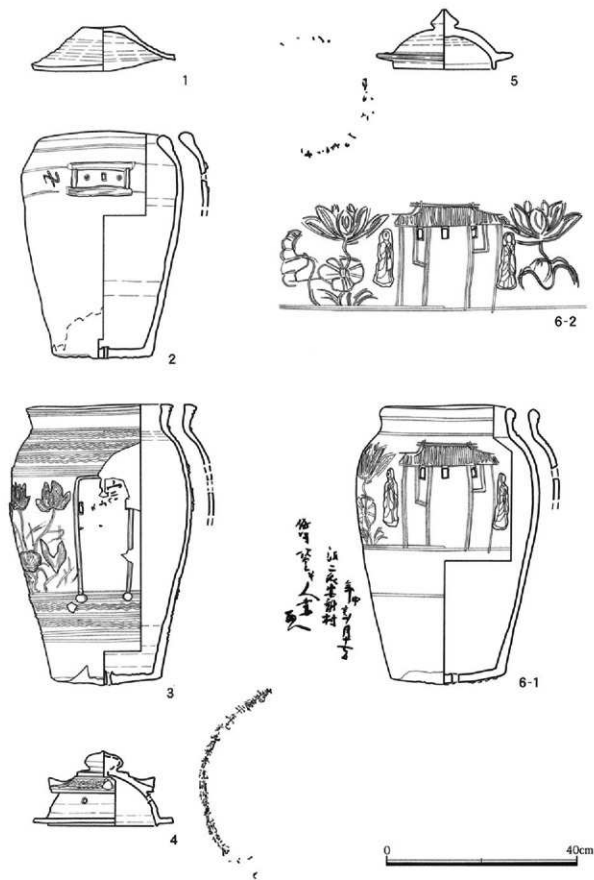
この頁の第2表とミガチの凡例は、『銘跡古器群(Ⅱ)』第V章 第1節 蔵骨器より転載している

第3表 威付器観察一覧

法基 上：上野陸 中：群馬 下：下野陸 (cm)

番	群回番号 国庫番号	地区	基番号	出土地点	身・蓋	名称又は原料	形式 分類	法基	群 No	文様	胎地	銘 番 氏	名 義 類	西野 死志年	西野 洗骨年	備 考	
1	第10回 1 国庫18の1	C	第16号基	高室 No.4	蓋	陶製無胎裏布	即c	9.1 9.4 20.0	2							つまみなし 蓋段なし	
2	第10回 2 国庫18の2	C	第16号基	高室 No.4	身	陶製無胎裏布	即1	25.5 47.8 20.8	1	縹彩						正野土器部に 表記あり 底穴4	
3	第10回 3 国庫19の3	C	第16号基	高室 No.5	身	陶製有胎裏布	V.4	31.1 59.1 23.3	C	縹彩 足付 (蓮花)	外面のみ マンガン が塗布さ れている					底穴20	
4	第10回 4 国庫19の4	C	第16号基	高室 No.2	蓋	陶製軒付裏布	Mb	11.0 15.2 23.0	D		外面はマ ンガンが 塗布 内面は薄 くマンガ ンが塗布	[内面ふ ち] 高室 二十年乙 亥九月廿 五日洗骨 儀保之兄 新堀仁隆	(備 保) (新 堀)		1815		
5	第10回 5 国庫19の5	C	第16号基	高室 No.1	蓋	陶製有胎裏布	Va	— 12.8 21.3	6		外面は物 裏を塗布 内面はマ ンガンを 塗布	[内面つ ぶふち] □□□ □□□					内面口縁部 に目跡あり 蓋段なし
6	第10回 6 国庫19の6	C	第16号基	高室 No.1	身	陶製有胎裏布	V.4	26.7 58.8 24.3	5	縹彩 (蓮花) 足付 (人物像)	外面は薄 く塗布 内面は底 面以外マ ンガンを 塗布	[左] □ □武治年 甲亥十月 十七日 高之屋 新 村/儀 保政上 并同人妻 なへ	(備 保) (新 堀)	1755 (乾隆20)年 乙亥 1815 (嘉慶20)年 乙亥		甲亥は乙亥 の間違いで はないか 口縁部にサ ンゴの目跡 4ヶ所あり 底穴16	
7	国庫18のA	C	第16号基	高室 高室 No.5	蓋	陶製無胎裏布	即b	— 9.0 3.8	B			[内面] 乾陶印□					蓋段なし
8	国庫18のB	C	第16号基	高室 高室 No.6	身	陶製無胎裏布	即3	28.3 44.0 21.7	A	縹彩						正野土器部に 表記あり 底穴8	
9	国庫19のC	C	第16号基	高室 No.5	蓋	陶製有胎裏布	即Q	9.3 23.0	3		外面のみ マンガン を塗布						
10	国庫19のD	C	第16号基	高室 No.2	身	陶製軒付裏布	M.2	29.0 60.5 24.4	4	縹彩 足付 (蓮花)	内外面は マンガン を塗布					底穴19	
11	国庫19のE	C	第16号基	高室 No.3	蓋	陶製軒付裏布	Vb	12.6 17.6 27.2	F		外面のみ マンガン を塗布						
12	国庫19のF	C	第16号基	高室 No.3	身	陶製軒付裏布	M.2	31.2 70.8 25.5	E	縹彩 足付 (蓮花・ 人物像)	外面のみ マンガン を塗布	[正野] 新堀村□ /□新堀 □□□ 年申十月 十日 焼 入に焼	(新 堀)				底穴6

※法基()内は標定値



第10図 (図版9・10) 無頸甕形藏骨器〈ホージャー〉(1・2)、有頸甕形藏骨器(3・5・6)、
軒付甕形藏骨器(4)

2. 銭貨

銭貨を第11図1（図版11の1）に示した。保存状態の良い寛永通宝である。サンミデーからの出土。資料の特徴は第4表を参照。

3. 沖縄産陶器

施釉陶器は、4点図示した（第11図2～5 図版11の2～5）。器種としては、杯・小碗・碗・鉢である。無釉陶器は1点図示した（同図6 同図版6）。器種は、措鉢である。各資料とも墓底からの出土である。個々の資料の特徴は第4図を参照。

4. 陶質土器

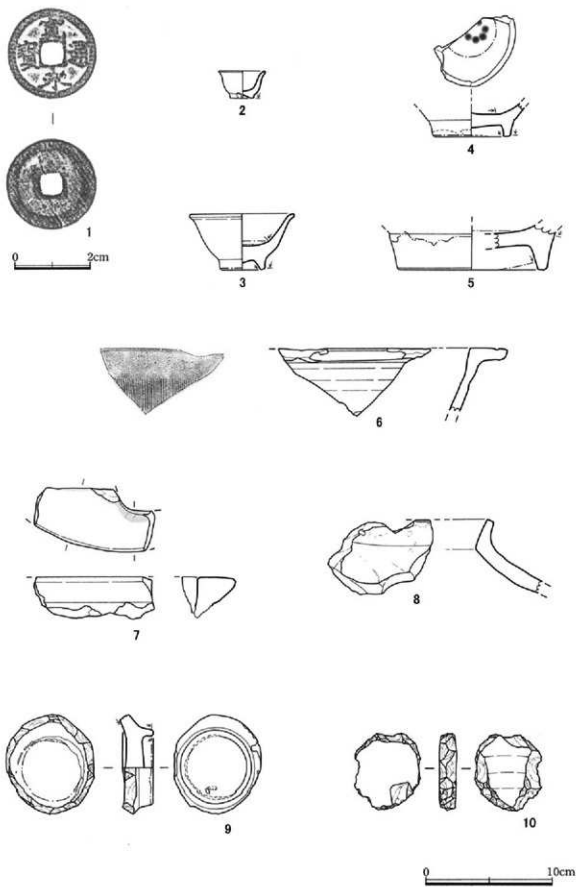
陶質土器は炉を第11図7（図版11の7）に示した。小破片のため、計測値は省いた。墓底フク土出土。資料の特徴は第4表を参照。

5. 土器

土器を第11図8（図版11の8）に示した。器面が橙色味を帯びる壺の口縁部である。小破片のため計測値は省いた。墓底フク土出土。資料の特徴は第11表を参照。

6. 円盤状製品

円盤状製品を2点図示した（第11図9・10 図版11の9・10）。材質としては、沖縄産施釉陶器（小碗の底部と無釉陶器の胴部）が使用されている。両資料とも墓底からの出土である。個々の資料の特徴は、第11表を参照。



第11圖 (圖版11)

錢貨：寬永通寶 (1)、沖繩産陶器：杯 (2)、小碗 (3)、碗 (4)、鉢 (5)、擂鉢 (6)

陶質土器：伊 (7)

土器：(8)、円盤状製品：(9・10)

第4表 第16号墓出土遺物観察一覧

押図番号 図版番号	種類	機種	法量 (法量・g)	出土地点	備考・特徴
第11図1 図版11の1	銭貨	寛永通宝 (古)	外径：1.4 孔径：0.6 厚さ：0.07 重さ：2.0	第16号墓 サンミデー	江戸 1636年初跡
第11図2 図版11の2	沖縄産 施釉陶器	杯	口径：3.7 器高：2.1 底径：1.8	第16号墓 墓底フク土	素地は灰白色。全面にオリーブ色の灰釉。 畳付、高台内は露胎。
第11図3 図版11の3	沖縄産 施釉陶器	小碗	口径：8.2 器高：4.4 底径：3.6	第16号墓 墓底 (横トレンチ)	素地はにぶい黄褐色。白化剤後透明釉を 施す。釉色は淡黄色。見込みに蛇の目釉 刺ぎ。
第11図4 図版11の4	沖縄産 施釉陶器	碗	口径：— 器高：— 底径：6.1	第16号墓 墓底フク土	素地はにぶい黄褐色。 釉色：外面は黒褐色。内面は白色。見込 は露胎で茶褐色の点描による花文。
第11図5 図版11の5	沖縄産 施釉陶器	鉢	口径：— 器高：— 底径：11.8	第16号墓 墓底アゼ	素地：灰白色 釉色：外面は黒褐色。畳付、高台外側は 露胎。内底は蛇の目釉刺ぎ。オリーブ色 の釉色。
第11図6 図版11の6	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口径：— 器高：— 底径：—	第16号墓 墓底アゼ	素地：にぶい赤褐色。黒色、白色粒を含む。 色調：内面は赤褐色。外面はにぶい赤褐 色。口縁平坦部に凹線を巡らす。脚目を 内面口縁直下でなで調整。成形時のロク 口痕が残る。
第11図7 図版11の7	陶質土器	炉	口径：— 器高：— 底径：—	第16号墓 墓底フク土	七輪上部。一部煤が残る。 器色：外側は橙色。中にはぶい黄褐色。
第11図8 図版11の8	土器	壺	口径：— 器高：— 底径：—	第16号墓 墓底フク土	器色は橙～にぶい橙色。黒、茶、白色粒 を混入。
第11図9 図版11の9	円盤状製品	沖縄産 施釉陶器	長径：7.6 短径：6.9 厚さ：1.4 (2.3) 重さ：87.3	第16号墓 墓底フク土	碗底部を打削。角が少ない楕円形。
第11図10 図版11の10	円盤状製品	沖縄産 無釉陶器	長径：5.9 短径：4.7 厚さ：1.4 重さ：61.0	第16号墓 (墓底)アゼ	壺か鉢の底部(脚部?)を打削。

第Ⅵ章 総括

前章までに発掘調査の成果について、述べた。ここでは、今一度整理してまとめたい。

本墓群の発掘調査の契機は、平成14年4月に実施された地域振興整備公団による那覇新都心土地区画整理事業に伴って発見されたことによる。

今回の調査は、平成5年度に発掘調査を実施した銘苅古墓群北地区西端部のC地区第1～8号墓と同じ並びに位置する墓群で、2基（第5号墓・第6号墓）の古墓が対象であった。

両墓とも基本的に琉球石灰岩を掘り込んで構築されており、外観に装飾はほとんど見られなかった。ただし、前述の第1～8号墓の発掘調査時の状況を見ると屋根の外観から、破風墓あるいは平葺墓となりそうである。

第16号墓において確認された蔵骨器は概ね6個体と考えられる。墓室内から蔵骨器No.1～4、墓庭からNo.5・6と番号を付して取り上げた。蔵骨器No.1・2・3・6から銘書き（ミガチ）が確認された。乾隆や嘉慶の年号の情報が得られており、本墓群の年代観を推察できる。

附編1に「銘苅古墓群北C地区第16号墓出土の人骨」を掲載した。

墓室蔵骨器No.2及びNo.3には2体分、蔵骨器No.1・4・5・6は1体分の人骨が納められていたようである。詳細は、附編1を参照頂きたい。

その他の遺物では、銭貨（寛永通宝）、沖縄産陶器（施釉碗・小碗・杯・鉢、無釉陶器のすり鉢）、陶質土器、土器壺片、円盤状製品が得られている。サンミデー出土の銭貨、墓庭出土の円盤状製品が注意された。

那覇新都心地区内では、銘苅古墓群南地区・銘苅古墓群北地区・ナーチャー毛古墓群・安謝西原古墓群・タカマサリ古墓群などの墓群が所在しており、約300基以上の古墓が確認されている。その中で、銘苅古墓群南地区（B地区）の一部や同C地区の第24号墓（伊是名殿内の墓）が現地保存されている。

今後、同地区内で調査された古墓について、出土した資料と合わせて、古墓の立地・分布・時代変遷・墓の構造の差異などを再整理・検討を加えることが必要と考える。機会を改めて検討したい。

なお、「タカマサリ古墓群出土の人骨」について附編2に掲載したので参照頂きたい。

【参考文献】

- | | | |
|-------------|----------|---------|
| 『銘苅古墓群（Ⅰ）』 | 那覇市教育委員会 | 1998年3月 |
| 『銘苅古墓群（Ⅱ）』 | 那覇市教育委員会 | 1999年3月 |
| 『銘苅古墓群（Ⅲ）』 | 那覇市教育委員会 | 2001年3月 |
| 『ナーチャー毛古墓群』 | 那覇市教育委員会 | 2000年3月 |
| 『安謝西原古墓群』 | 那覇市教育委員会 | 2001年3月 |
| 『タカマサリ古墓群』 | 那覇市教育委員会 | 2003年3月 |

附 編 1

銘苧古墓群北C地区第16号墓出土の人骨

第1節 はじめに

那覇市教育委員会による銘苧古墓群北C地区16号墓の発掘調査において、人骨が検出されたのでその概略を報告する。人骨は墓室内の厨子竈4基と墓底の厨子竈2基から計8体分が検出されている。

第2節 人骨の所見

検出された人骨の鑑定結果を表1に示す。

表1 那覇市銘苧古墓群北C地区16号墓鑑定人骨一覧

出土地点	男性	女性	性別不明		計
			成人	幼児	
墓室 カメ No.1			1		1
墓室 カメ No.2	1	1			2
墓室 カメ No.3			1	1	2
墓室 カメ No.4			1		1
墓底 カメ No.5			1		1
墓底 カメ No.6			1		1
計	1	1	5	1	8

墓室カメNo. 1：(性別不明・成人)

保存状態の悪い骨小片が少量検出された。確認できた部位は頭蓋骨片、椎骨片、右手舟状骨、左右有頭骨、大腿骨頭片、右内側楔状骨、右第3中足骨片などで1体分と思われる。いずれも小片であるため性別の判定は出来なかった。年齢については頭蓋骨片や四肢骨片の形状から、成人(20歳以上)には達していると思われるが、詳細は不明である。

墓室カメNo. 2：(成人男性、成人女性)

保存不良の人骨片2体分が確認された。残存部位は頭蓋骨小片少量、右機骨片1、左右大腿骨体部片各2、左右寛骨片各2、左右脛骨骨体部片各1、右腓骨片1、右距骨1などである。寛骨の形状、四肢骨のサイズなどから、2体は明らかに男女のペアである。年齢はともに成人に達していると思われるが、それ以上の細分は困難である。但し、以下の歯式に示す個体は咬耗度(Broca 1度)から20代から30代の成年と思われるが、男女のどちらのものかは確定できなかった。歯はすべて遊離した状態で検出されている。

M ³ M ² M ¹	P ¹	C	I ¹	I ¹	C	M ¹
--	----------------	---	----------------	----------------	---	----------------

墓室カメNo. 3：(性別不明・成年、幼児)

頭蓋骨片、肩甲骨片、寛骨片、左右大腿骨片などの骨小片が少量検出された。また、歯が2体分検出されているが、1体は乳歯と未萌出永久歯を含む幼児(2~3歳)のものである。成人の性別は不明であるが、歯の咬耗度(Broca 1度)から、年齢は20代から30代の成年と推定される。歯式を以下

に示す。歯はすべて遊離した状態で検出されている。

$M^3 \ M^2 \ M^1 \ P^2$ $M^3 \ M^1 \ P_2$	$C \ I^1 \ I^2$ C	$P^1 \ P^2 \ M^1 \ M^2 \ M^3$ $C \ M_1 \ M_2$
(M^1) $m^2 \ m^1$ m_2	(I^1)	m^2 $m_1 \ m_2 \ (M^1)$

小文字：乳歯、大文字：永久歯、()：未萌出

墓室カメNo. 4：(性別不明・成年)

頭蓋骨片、左上腕骨片、右桡骨片、左右尺骨片、右大腿骨片、右脛骨片など、保存不良の人骨片1体分が検出された。性別は不明、年齢は以下の歯式に示す残存歯の咬耗度(Broca 1度)から20代から30代の成年と推定される。歯はすべて遊離した状態で検出されている。

$M^3 \ M^2 \ M^1 \ P^2$ $M^3 \ M_2 \ M^1 \ P_2 \ P_1$	$C \ I^1$ I^1	$C \ P^1 \ M^1 \ M^2$ $C \ M_1 \ M_2 \ M_3$
--	--------------------	--

墓室カメNo. 5：(性別不明・成人)

1体分と推定される保存不良の四肢骨細片が検出されている。性別は不明、年齢は四肢骨片の形状から成人には達していると思われる。

墓室カメNo. 6：(性別不明・成年)

保存不良の椎骨片、四肢骨片、下の歯式に示す1体分の歯が検出された。性別は不明、年齢は歯の咬耗度(Broca 1度)から成年(20代から30代)と推定される。

$M^3 \ M^2$ $M_2 \ P_2 \ P_1$	C	M^2 $P_1 \ P_2 \ M_1 \ M_2 \ M_3$
----------------------------------	-----	--

第3節 まとめ

銘苅古墓群北C地区16号墓出土の6基の厨子甕から8体分の人骨が検出された。その内訳は、成人男性1体、成人女性1体、性別不明・成人5体、幼児1体である。また、4基の甕には1体の被葬者が、2基の甕には2体の被葬者が納められていたが、2体の組み合わせは、成人男女の組み合わせと性別不明・成人と幼児の組み合わせだった。

骨の保存状態が悪く、形質の特徴などを調べることは出来なかった。

尚、本報告においては、人骨の整理を鳥袋、人骨の鑑定を鳥袋と土肥、そして原稿の執筆を土肥が担当した。

(土肥直美・鳥袋利恵子)

附 編 2

タカマサリ古墓群出土の人骨

第1節 はじめに

那覇市教育委員会の発掘調査によって出土したタカマサリ古墓群の人骨について報告する。人骨は銅製容器内から1体分(成年・男性)が検出されている。調査担当者によれば、金属製容器を蔵骨器として利用した例は沖縄ではこれまでに知られていないという。年代の詳細も不明であるが、被葬者がどのような人であったのか興味もたれる。銅製容器を埋め込む際の覆土層と考えられている第5層からも上腕骨片が1片検出されているが、詳細が不明であるため、本報告ではこの銅製容器内から検出された人骨についてのみ報告する。尚、通常の計測はKnussman (1988)¹⁾に、顔面平坦度はYamaguchi (1973)²⁾に従った。

第2節 銅製容器内人骨の出土部位

保存状態は比較的良好であり、ほぼ全身骨が検出されたが、頭蓋骨の顔面部は破損を受けている。残存部位を図1に示す。詳細な鑑定が困難であるため図には示していないが、その外に肋骨片、椎骨片も検出されている。残存する歯の歯式を以下に示す。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	○	○	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	○
M ³	M ²	M ¹	○	○	○	○	○	○	○	○	P ₁	P ₂	○	○	M ₃

○：歯槽開放



図 タカマサリ銅製容器内人骨

第3節 銅製容器内人骨の所見

性別・年齢の推定：

四肢骨筋付着部の発達良好で骨端部のサイズも大であることから、性別は男性と推定した。年齢については歯の咬耗度(Broca 1度)から、成年前半(20歳代)程度と推定した。

頭蓋骨：

頭蓋骨の保存が悪く、顔面の特徴などは良く分からなかったが、鼻骨部は膨隆しており(鼻骨弦：9.9mm、鼻骨垂線高：4.4mm、鼻骨平坦度指数：44.1)、鼻の高い顔立ちだったと思われる。また、下顎骨はきゃしゃで、下顎枝と下顎体の成す角度が大きく、細くて長い顎をしていたと思われる。いずれにしても、短頭、低顔の平均的な沖縄の特徴とは異なり、かなり特異な風貌だったのではないだろうか。右下顎大臼歯に蝕蝕が認められる。

四肢骨：

四肢骨は全体的に頑丈で、筋付着部も明瞭である。計測値を表1・2に示す。大腿骨は右の骨体断面形に柱状傾向が認められるが、左には認められない。また、脛骨の扁平傾向は左右とも認められない。四肢骨は生活に関する情報を多く持っていることが知られており、縄文人にみられる大腿骨の柱状性や脛骨の扁平性は、彼等が野山を駆けめぐって狩猟や採集をしていたことを物語る特徴だと考えられ

ている³⁾。また、沖繩先史時代人や縄文人は相対的に上肢が発達した体型だったと考えられているが⁴⁾、本例の上肢の発達程度を示す示数（上腕骨最小周/大腿骨中央周）も78.2となり、比較的上肢の発達した体格だったことが推測される。1例のみのデータであるため詳細は不明であるが、どのような生活環境にあった人であるか興味深い。

表1 上肢骨計測値

上肢骨			
5	中央最大幅	l	21
6	中央最小幅	l	17
7	最小周	r	61
		l	61
6/5	体断面示数	l	81.0
尺骨			
3	最小周	r	37
11	体矢状径	r	12
12	体横径	r	16
11/12	体断面示数	r	75.0
橈骨			
3	最小周	r	44
4	体横径	r	17
5	体矢状径	r	12
5(6)	下嚙幅	r	36
5/4	体断面示数	r	70.6
(mm)			

表2 下肢骨計測値

大腿骨			
6	体中央矢状径	r	26
		l	25
7	体中央横径	r	23
		l	25
8	体中央周径	r	78
		l	79
9	体上横径	r	27
		l	29
10	体上矢状径	r	25
		l	25
6/7	体中央断面示数	r	113.0
		l	100.0
10/9	体上断面示数	r	92.6
		l	86.2
脛骨			
8a	栄養孔位最大径	r	34
9a	栄養孔位横径	r	25
10a	栄養孔位周	r	95
10b	最小周	r	70
9a/8a	栄養孔位断面示数	r	73.5
(mm)			

第4節 まとめ

那覇市教育委員会によるタカマサリ古墓群の発掘調査において、銅製の蔵骨器に納められた成年の男性人骨が出土した。金属製容器を蔵骨器として利用した例は沖繩ではこれまでに知られていないという。年代の詳細は不明であるが、保存状態は比較的良好であり、ほぼ全身骨が検出された。頭蓋骨の顔面部が破損を受けており、顔の詳しい特徴を知ることは出来なかったが、鼻が高く、細くて長い顎をした、かなり特異な風貌だったと推定された。右下顎大白歯に齧痕が認められた。四肢骨の特徴からは上肢の発達した、かなりがっちりした体格だったことが推測された。

尚、本報告においては、人骨の整理を島袋、人骨の鑑定を島袋と土肥、そして原稿の執筆を土肥が担当した。

(土肥直美・島袋利恵子)

参考文献

- 1) Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
- 2) Yamaguchi B. (1973) Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bulletin of the National Science Museum, vol.16, pp.161-171.
- 3) 山口 敏 (1982) 縄文人骨の特徴. 加藤晋平他編 縄文文化の研究1 縄文人とその環境, 雄山閣, pp. 27-54.
- 4) 土肥直美, 泉水 奏, 瑞慶覧朝盛, 譜久嶺忠彦 (2000) 骨からみた沖繩先史時代人の生活. 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編, 琉球・東アジアの人と文化 (下巻), 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会, pp.431-448.

图 版



図版 1 那覇新都心と遺跡の位置 (2003年2月撮影1:10,000)

【上が北】



銘苅古墓群北C地区と安南東原北遺跡
(2003年度調査 北西から)



銘苅古墓群北C地区
(1993年度調査 第5～8号墓
南西から)



遺跡周辺の現在の状況(北から)

図版2 銘苅古墓群北C地区：遺跡の全景



発掘調査開始期の状況（南西から）



清掃後の状況（南西から）



墓庭半截作業状況（西から）

図版3 銘苅古墓群北C地区：第5号墓の状況



清掃作業の状況



清掃後の状況



墓口の状況（墓室より）

図版 4 銘苅古墓群北C地区：第5号墓室の状況



墓室の発見当時の状況（南から）



墓庭の作業状況（南西から）



正面図実測作業の状況（南から）

図版5 銘苅古墓群北C地区：第16号墓の状況



墓庭清掃後の状況（南西から）



墓室清掃後の状況（南西から）



墓口の状況（墓室より）

図版 6 銘苅古墓群北C地区：第16号墓の状況



墓室の蔵骨器安置状況（南西から）



墓室の蔵骨器検出状況（南から）



墓庭の蔵骨器検出状況（北から）

図版7 銘苅古墓群北C地区：第16号墓の状況



発掘調査の安全祈願状況
(第16号墓にて)



第1次発掘調査メンバー
(2002年度)



第2次発掘調査メンバー
(2003年度)

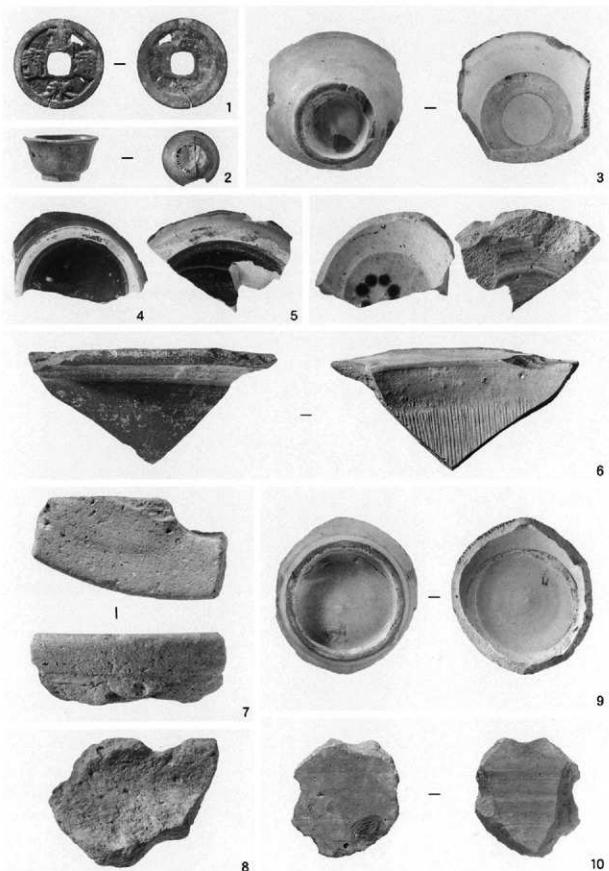
図版8 作業の安全祈願と安瀨東原北遺跡及び銘苅古墓群北C地区
調査メンバー



図版9 (第10図) 蔵骨器：無頸壘形蔵骨器〈ボージャー〉(1・2)、有頸壘形蔵骨器(5・6)
 (図版のみ) 蔵骨器：無頸壘形蔵骨器〈ボージャー〉(A・B)



図版10 (第10圖) 藏骨器：有頸甕形藏骨器 (3)、軒付甕形藏骨器 (4)
 (図版のみ) 藏骨器：有頸甕形藏骨器 (C)、軒付甕形藏骨器 (D・E・F) (※E・F右写真は後面撮影)



圖版11 (第11圖) 錢貨：寛永通宝(1)、沖縄産陶器：杯(2)、小碗(3)、碗(4)、鉢(5)、摺鉢(6)
 陶質土器：炉(7)
 土器：(8)、円盤状製品：(9・10)

那覇市文化財調査報告書第64集

安謝東原北遺跡 銘苺古墓群(V)

—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告XVII—

発行 2016年5月31日

那覇市

〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課

TEL 098-917-3501

FAX 098-917-3523

印刷 有限会社 金城印刷

〒902-0073 沖縄県那覇市上間565-1

TEL 098-835-9475

FAX 098-835-9476
